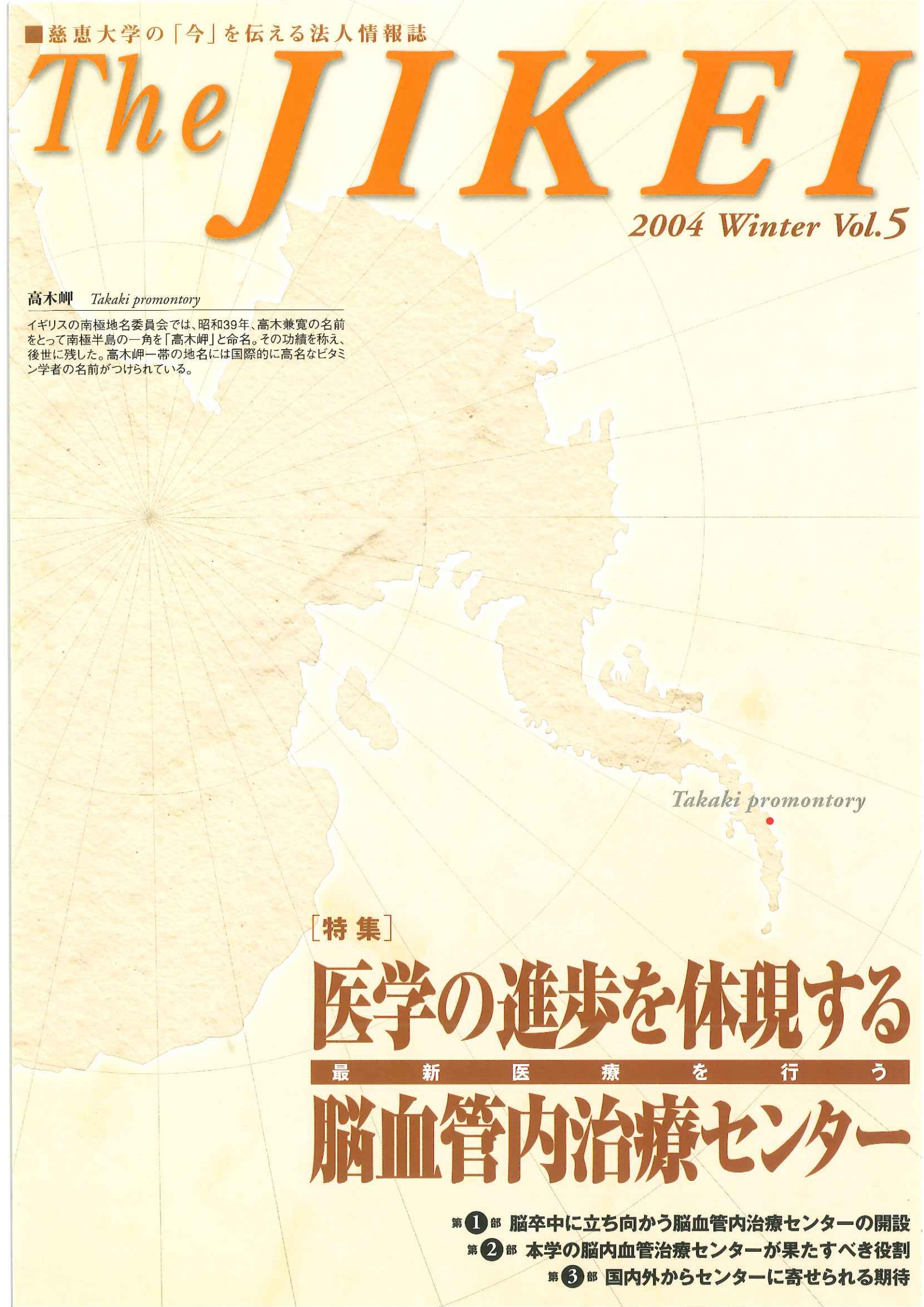
■慈恵大学の「今」を伝える法人情報誌

The JIKEI

2004 Winter Vol.5

高木岬 *Takaki promontory*

イギリスの南極地名委員会では、昭和39年、高木兼寛の名前をとって南極半島の一角を「高木岬」と命名。その功績を称え、後世に残した。高木岬一帯の地名には国際的に高名なビタミン学者の名前がつけられている。



［特集］

医学の進歩を体現する

最新医療を行う

脳血管内治療センター

第1部 脳卒中に立ち向かう脳血管内治療センターの開設

第2部 本学の脳内血管治療センターが果たすべき役割

第3部 国内外からセンターに寄せられる期待

新年にあたって

学校法人 慈恵大学 理事長
東京慈恵会医科大学 学長 栗原 敏

新年明けましておめでとうございます。皆様にはご清祥のうちに新年をお迎えのことと思います。

今年は、本学と附属病院が新たな体制で、組織を含めた改革にこれまで以上に取り組んでいかなくてはならない年であるという、例年とは異なる緊張感をもって新年を迎えました。

皆様も私と同様、厳粛な気持で新年をお迎えになったことと思います。

昨年、青戸病院で発生した医療に関する事件では、亡くなられた患者さまとご遺族に対して改めて衷心よりお詫び申し上げます。また、本学附属病院を受診されている患者さま、本学の教職員、同窓、医療関係者、監督官庁、日本医師会、国民の皆様に多大なご迷惑をおかけし誠に申し訳ありませんでした。

さて、青戸病院事件の詳細は大学事故調査委員会（委員長：井上聖啓教授）が、関係資料と関係者の聴き取り調査をもとにして、昨年12月1日に、“東京慈恵会医科大学附属青戸病院泌尿器科で行われた内視鏡下前立腺全摘出術における医療事故についての調査報告書”を慈恵大学医療安全管理外部委員会（外部委員会）に提出しました。この外部委員会は大学事故調査委員会とは別に、学外識者（6学会の代表者、日本医師会顧問弁護士、患者代表弁護士、報道関係者）から構成されている委員会（委員長：勝又義直教授、名古屋大学大学院教授）で、この事件の問題点の洗い出し、再発防止策の提言とその実施の検証を行います。今後、公判が始まり（平成15年12月25日の予定）、これまで報道されていることとは異なる事実が明らかになるかもしれません。事実の確認、責任の所在、医療事故への対応などを含めたこの事件の全容の解明は学内外で進むと思います。刑事責任に関する部分は法廷の判断を待ちたいと思います。

事件の全容解明と情報公開は、今後の改善策を考える基礎となります。外部委員会で検討されている内容などは、時期をみて公開したいと考えておりますが、そのためにはご遺族のご了解を得ることが必要です。ご遺族のご了解をいただいていない現状では、教職員の皆様に詳細をご報告できないということをご理解いただきたいと思います。今後、ご遺族のお気持ちに充分配慮して大学は誠意をもって対応し、ご遺族のご理解が得られ、皆様に情報が公開できるように最大限努力してまいります。

私はこの事件の全容を解明することが、本学の医療安全管理のシステムを構築する上で必須であると思いますが、それと同時に、現状でも実施可能な医療安全管理体制を検討し、できることから着手することが、患者さまや教職員から求められているものだと考えます。

青戸病院事件を機に、本学では様々な取り組みがすでに始まり、その中のあるものは実行に移されています。今年はこれらの取り組みを整理し、制度化する必要があります。関連する会議で議論いただくべきものは検討のうえ意見を出していただき、また、理事会主導で実施すべきものは私から提案したいと思います。

先に述べましたように外部委員会では、このような事件の再発を防止するための改善策を提言する予定ですので、大学の医療安全管理システムの改善には、外部委員会の提言を尊重しなくてはなりません。外部委員会の答申は、委員会が順調に開催され調査が進めば、本年、2月頃には中間答申が出る予定です。この外部委員会の進捗状況を見ながら、改善案を検討・実施したいと考えています。

さて、私自身が短期・中期的に本学と附属病院が取り組む課題について考えていることをまとめてみました。

第1に医師・看護師の医療水準の向上を図らなくてはなりません。それには、卒前・卒後をとおして医療者としての知識、技能、態度を涵養するシステムを作る必要があると思います。知識を深め技能を磨くために、医師や看護師が学内だけでなく、学外に出て積極的に研修することができる機会を設けることが、医療者としての意識の向上にもつながると思います。

第2に医療の手続きと診療許可制度を明確化することも、医療の責任の所在を明らかにするために必要です。患者さまの同意をとる手続きの改善、特に特殊な医療を行う場合の手順と説明などを分かりやすくすることが必要です。病院長、診療部長、診療委員の責任はどのようになっているのか、病院の責任体制を明確にする必要があります。

第3に医療の安全管理を徹底して行うシステムを作る必要があります。そのためには医療安全管理室が中心となって、病院で行われている医療情報を集め、医療現場を監視して注意すべき情報を現場に還元する体制を作ることが必要です。特に、密室となる手術室の監視機構は重要だと思います。これまでも手術室における判断基準はありましたが、より明確にすることが必要です。

第4は医療事故発生時の対応の改善です。今回の青戸病院におけるような医療事故が発生したときの、院長に対する報告の手順、患者さまとそのご家族への対応などについての具体的な手順を周知徹底させなくてはならないと思います。また、場合によっては弁護士と速やかに相談することや監督官庁に届け出る判断が迫られるので、迅速な情報伝達と判断ができるシステムが必要となります。ここでも医療安全管理室を中心としたシステムが重要となります。

第5は医師の評価と人事の問題があります。本学は病院機能を大学と切り離して、患者さまを中心とした医療が実践できるように、院長の権限を強め診療部組織を作ってきました。そのため、病院医師人事委員会が医師を評価することを始めましたが、医療技術の評価などを含めた評価システムとはなっていません。今後、医師の評価法を改善する必要があると思います。また、評価結果をどのように人事などに反映させていくかということも大きな課題です。

医師の技量評価は大学だけの問題ではありません。学会の認定医制度との関係、関連学会の医療許可条件などとの整合性に充分配慮した評価を考えなくてはなりません。これは日本の医療界が取り組むべき問題でもあります。すでに一部の学会は手術のガイドラインを提案しています。

本学はこれまで卒前教育改革に取り組み、他学に先駆けて独自のカリキュラムを作り教育の改善を図ってきました。私たちの取り組みが学外でも評価され、特色ある大学教育支援プログラムに選定されたことはご存知のとおりです。また、卒後臨床研修は約10年前から他大学に先駆けてスーパーローテイション方式を採用してきました。また、レジデント制を採用して専門性を高めることにも配慮してきました。今後、これまでの卒後教育の問題点を洗い出し、医師育成プログラムを改善していくことが求められています。また、医療の安全管理と倫理の教育を医師、看護師など全ての医療従事者を対象として行い、医療人としての意識を高めるための方策も実行に移されようとしています。

年頭にあたり、今年、重点的に取り組むべき課題を挙げ、皆様のご理解を得ながら着手できるところから実践したいと考えておりますので、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

本文は昨年12月上旬に書いたものです。青戸病院の件はこれ以後、情勢が変化することが予想されますのでその点をお含みおきの上、お読みいただきたくお願い申し上げます。

慈恵大学の「今」を伝える法人情報誌
Vol. 5 2004 Winter
The JIKEI

Contents

特集 3P 医学の進歩を体現する最新治療を行う脳血管内治療センター
脳血管内治療センター開設に見る最新医療分野への取り組み。

慈恵最前線 8P 近視矯正手術レーシック（LASIK）手術 …… 佐藤　雄太
国内最高水準を誇る施設で行われるレーシック手術を紹介。

視点 10P 歯と健康な身体について …… 田辺　晴康
健康を保持するうえでの歯の重要性を再確認する。

研究余話 11P 話し手の配慮は聞き手に伝わっているのか …… 野呂　幾久子
日本語の新しいイントネーションから意識のギャップを考察する。

歴史 12P 評伝 高木兼寛 第四話　論より証拠 …… 松田　誠
幻の脚気菌論争における実学主義の勝利。

随想 14P 国際交流 …… 住吉　蝶子
他者の価値観を理解するための鍵は行動を直に観察し触れること。

学内めぐり 15P 褥瘡対策チーム …… 上出　良一
褥瘡の発生率の抑制に取り組む混合チームでの活動を紹介。

施設・設備 16P 第三病院に新手術棟完成し運用開始
効率的で安全な近未来の手術を可能にする第三病院の新手術棟の設備を紹介。

MEMORIAL 17P 恵和会創立70周年 …… 興梠　清美
恵和会創立70周年にあたって記念式典を開催。

The JIKEI NEWS FLASH 18P 特色ある大学教育支援プログラムの選定/
セント・トーマス医学校からの選択実習生など
注目すべき最新ニュースを満載!

生涯学習 26P 各種セミナーや研修会への取り組み

BULLETIN BOARD
27P 行事
28P 補助金・助成金
29P 公示
30P 学事・慶弔
31P 人事
40P 附属病院医師人事委員会報告
43P 東京慈恵会公報
44P ご寄付のお礼
45P 創立百二十周年記念事業寄付者名簿

平成16年度入学試験について

試験区分		医学科 前期入学試験	医学科 後期入学試験	看護学科
募集人員		50名	50名	30名
受験料		60,000円 但し、後期試験を同時に出願する場合は合計で100,000円	60,000円 但し、前期試験を同時に出願する場合は合計で100,000円	30,000円
出願期間		12月22日（月）～1月22日（木）	12月22日（月）～2月17日（火）	1月5日（月）～1月27日（火）
一次試験	試験日	1月28日（水）	2月25日（水）	2月10日（火）
	試験会場	五反田TOCビル本館	五反田TOCビル本館	本学・医学部看護学科校舎
	試験科目	理科（物理、科学、生物の3科目から2科目選択）・数学・英語・小論文		国語・数学・英語・理科（科学、生物の2科目から1科目選択）・適性検査
	合格発表	2月5日（木）午後3時	3月4日（木）午後3時	2月13日（金）午後3時
二次試験	試験日	2月8日（日）、2月9日（月） どちらか希望日に実施	3月7日（日）	2月14日（土）
	試験会場	本学・西新橋校舎	本学・西新橋校舎	本学・医学部看護学科校舎
	試験科目	面接		面接
	合格発表日	2月12日（木）午後3時	3月10日（水）午後3時	2月17日（火）午後3時
入学手続締切日		2月18日（水）正午まで	3月18日（木）正午まで	2月23日（金）正午まで
初年度納入金		450万円 （入学金100万円、授業料250万円、施設拡充費100万円）、分納も可能		150万円 （入学金50万円、授業料100万円）
納入金返還手続締切日		3月25日（木）午後3時まで		3月25日（木）午後3時まで

■平成16年 主な大学行事予定

1月5日（月）
新年挨拶交歓会
（午後4時から大学1号館講堂、テレビカンファレンス）

1月10日（土）
同窓会・父兄会新年名刺交換会
（午後4時から愛宕山東急イン1階「愛宕」）

1月28日（水）
医学科平成16年度前期第1次入学試験
（午前10時から筆記試験、小論文）

1月31日（土）
医学科西新橋校教授退任記念講義
（午後2時30分から大学1号館講堂）
医学科教授退任記念パーティー
（午後5時10分から高木2号館地下1階教職員食堂）

2月5日（木）
医学科教授会議（臨時）（午後2時よりB会議室）
医学科平成16年度前期第1次入学試験合格発表（午後3時）

2月8日（日）・9日（月）
医学科平成16年度前期第2次入学試験（面接）

2月10日（火）
看護学科平成16年度第1次入学試験
（筆記試験・適正検査：午前10時より）

2月12日（木）
医学科教授会議（臨時）（午後2時よりB会議室）
医学科平成16年度前期第2次入学試験合格発表（午後3時）

2月14日（土）
看護学科平成16年度第2次入学試験（面接）

2月17日（火）
看護学科平成16年度入学試験
合格発表（午後3時）

2月20日（金）
成医会第1249回例会　大学1号館講堂

2月25日（水）
医学科平成16年度後期第1次入学試験
（筆記試験、小論文）

3月4日（木）
医学科教授会議（臨時）（午後2時よりB会議室）
医学科平成16年度後期第1次入学試験合格発表
（午後3時）

3月7日（日）
医学科平成16年度後期第2次入学試験（面接）

3月10日（水）
医学科教授会議（臨時）（午後2時よりB会議室）
医学科平成16年度後期第2次入学試験
合格発表（午後3時）

3月25日（木）
第79回医学科卒業式・第9回看護学科
卒業式（午後1時30分から中央講堂）

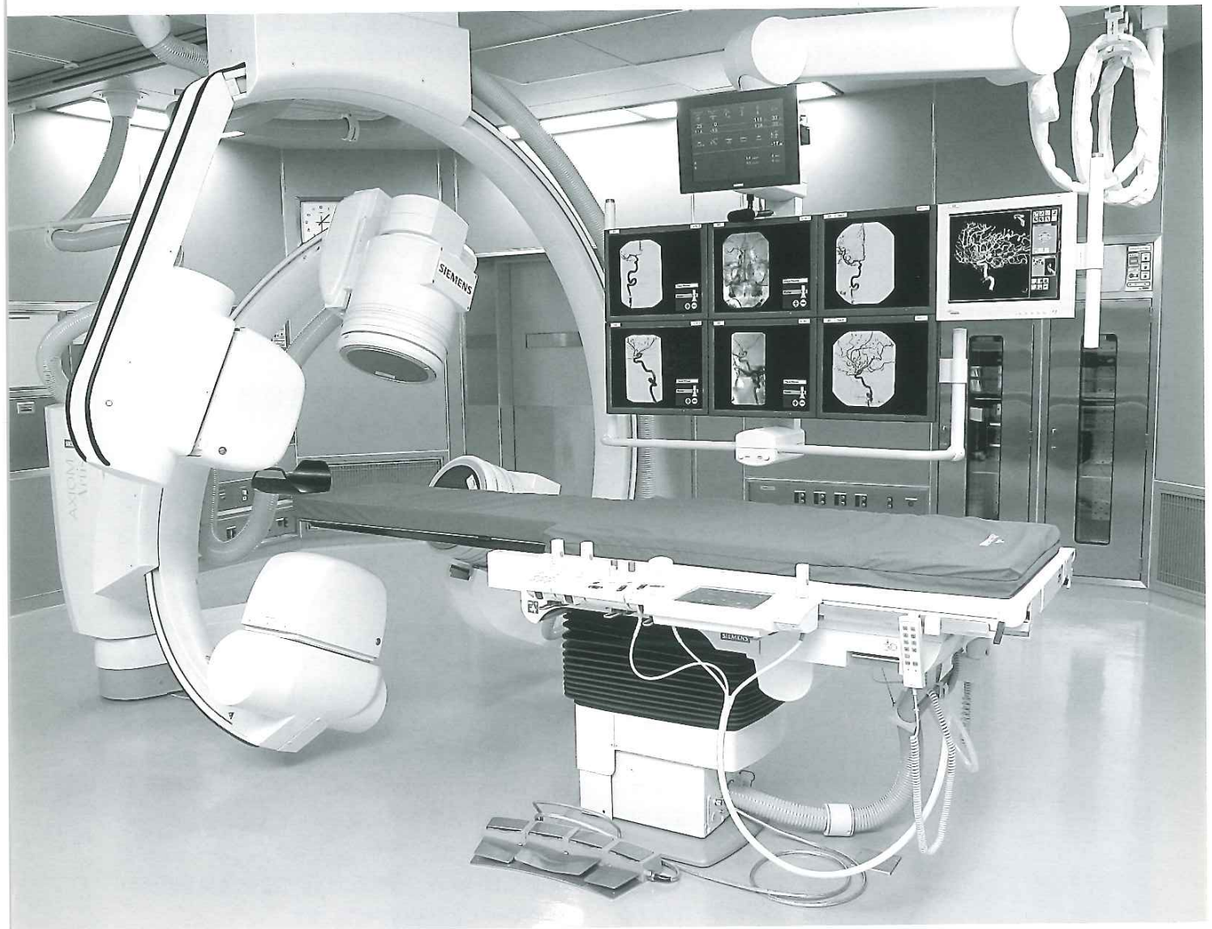
4月1日（木）
平成16年度大学院入学式
（午後1時から大学1号館講堂）

4月8日（木）
平成16年度医学科・看護学科入学式
（午後2時から中央講堂）

5月1日（土）
創立記念日

医学の進歩を体現する最新医療を行う脳血管内治療センター

2003年11月に、東京慈恵会医科大学附属病院に
「脳血管内治療センター」が開設されました。
緊急性を必要とされる「くも膜下出血」など脳卒中に素早く対応することができる
世界でも最新の設備を整えた治療施設で、米国から帰国した
村山雄一センター長を中心に最先端の治療を提供していきます。
今回の特集では、この「脳血管内治療センター」にスポットをあて、
最新医療分野に積極的に取り組む慈恵医大の姿をご紹介していきます。



第一部 脳卒中に立ち向かう 脳血管内治療センターの開設

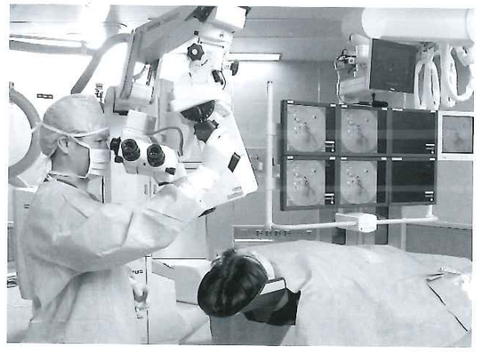
開頭手術をしない コイル式の治療方法に対応

脳卒中は日本人が最もよく患う病気の一つであり、死亡率も高く危険な病気です。しかし、専門の脳卒中センターは少なく、治療施設の整備が遅れています。また、欧米では、血管内にカテーテルという細い管を入れて患部を特別なコイルで塞ぐ脳血管内手術が急速に普及していますが、日本での普及は遅れています。この手術によって、今までの外科的手術では対応できなかった箇所への施術が可能になり、開頭手術をしないために短期間で元の生活に戻ることができます。日本でも治療症例が増えていますが、対応できる病院や医師が少ないのが現状です。

「脳血管内治療センター」は、慈恵医大から米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に出向し、8年間にわたり脳血管内手術を担当してきた村山雄一氏をセンター長に迎えてスタートしました。UCLAは世界で初めて脳血管内手術を開発したメッカであり、村山センター長は、同校の準教授まで勤めた脳血管内手術のエキスパートです。同センターには、世界でも類を見ない最先端のコンセプトのもとに最新の設備が導入され、365日24時間体制で治療に対応できる体制を整えて、最新医療への新たな取り組みが始まっています。

脳血管内治療専用にデザインされた 世界で初めての手術室

短時間で行うことができ、患者への身体的な負担も少ない脳血管内治療ですが、手術を行うためには、高価な血管撮影装置が必要になり、撮影した二次元の映像を見ながら手術するため、立体的なイメージがつかみづらいなどの欠点もあります。また、通常、血管撮影を行う検査室で手術が行われるため、手術中に動脈瘤が破裂するなど外科的な対応が必要になった場合、手術室に移動するのに時間がかかり致命的な事態を招いてしまうことがあります。



そこで「脳血管内治療センター」では、手術室内に専用の血管撮影装置を導入、三次元で画像を映し出し、手術前に色々な角度から最善の手術方法を検討することができるようになっています。また、手術室は、開頭手術と血管内治療の両方に対応して作られ、より安全に手術を行うことができます。こうしたコンセプトで作られた手術室は世界にも類がなく、世界で初めて脳血管内治療専用にデザインされた手術室として注目されています。

最新医療技術を普及させる アジアの拠点として

さらにこの「脳血管内治療センター」では、患部に注入するコイルについても世界最先端の取り組みが行われています。現在、コイルとしては電気的に接続部分を切断するプラチナコイルが使われていますが、新たに次世代コイルとしてマトリックスコイルが開発され、欧米では昨年から臨床に使用されて、すでに1000以上の症例があります。村山センター長はこのマトリックスコイルの開発者であり、ドクターを指導する認定トレーナーでもあります。

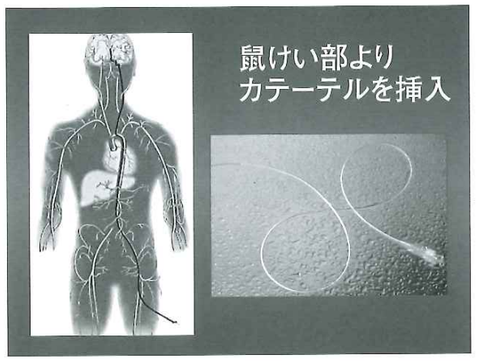
「脳血管内治療センター」では、国内外の医師に対して、大学1号館地下1階にある動物実験研究施設においてマトリックスコイルのトレーニングを行い、アジアにおける最先端の治療技術の拠点として活動していくことになります。また、他大学や企業とのコラボレーションにも積極的に取り組み、慈恵医大として研究成果を世の中に広めていくことが期待されています。

第二部 本学の 脳血管内治療センターが 果たすべき役割

脳内血管治療センター長
村山 雄一

センター設立の背景

脳卒中は日本人の死因の第3位、罹患率第1位の国民病です。現在の日本において脳卒中への対応は欧米に比べると立遅れており、特に都内には脳卒中センターが充分に整備されておりません。近年の欧米を中心に脳卒中センターが普及した最大の理由はカテーテルを使った脳血管内手術の発展に依るところが大きく、特にくも膜下出血の原因となる脳動脈瘤に対するプラチナコイルによる塞栓術がカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で開発されて以来、従来の開頭手術からその治療法が劇的に変化しました。近年の脳ドックの整備や国民の脳卒中に対する強い関心といった環境を考えると都心に脳卒中を専門に治療するセンターのニーズがあり、立地条件のよい慈恵医大に設置することは大学にとってもメリットがあると考えられます。



私は脳神経外科阿部教授、岡村前理事長をはじめとする大学関係者のご配慮により1995年より8年間にわたりUCLAにおいて診療および研究に従事してまいりました。研究面ではマトリックスという新しい次世代塞栓コイルの開発、臨床応用に成功し、これをきっかけにNIH（国立衛生研究所）の研究費を獲得し再生医療技術を応用した治療法を研究中でした。臨床面では脳卒中センターのメンバーとして脳卒中の治療に従事していたのですが阿部教授より脳卒中を対象とするセンターを慈恵医大に開設する構想を聞き帰国いたしました。現在も米国カリフォルニア大学では我々の立ち上げたプロジェクトを慈恵医大の後輩の結城先生らが中心となって継続しています。

最新治療技術のトレンド

血管内治療の進歩で最も重要な要素はカテーテルや塞栓物質をはじめとする新しい医療材料の開発とデジタルサブトラクションアンジオグラフィー（DSA）という画像システムの進歩です。

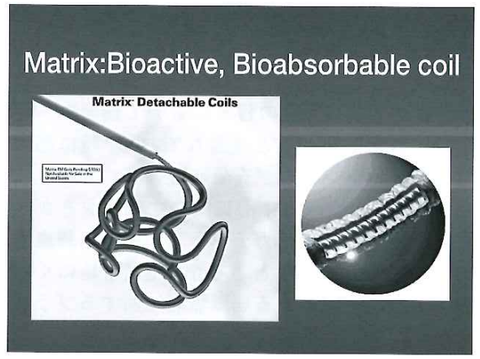
第一点目の塞栓物質はGDC[注1)]というプラチナコイルの発明で、脳動脈瘤の治療は切らずに治せる時代になりました。GDCは瘤の中にコイルを安全に留置することができる画期的なシステムですがプラチナは生体反応性が乏しいために瘤が再発するという欠点があります。

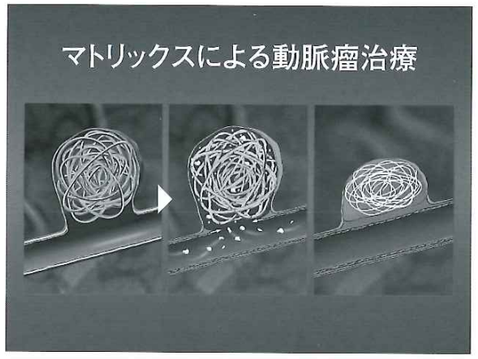
私たちは再生医療技術を応用したまったく新しいコンセプトの次世代コイルを開発しました。このマトリックスと命名された新しいコイルは生分解性ポリマーを用いており、創傷治癒機転を促進することでGDCよりさらに高い根治治療が可能となりました。マトリックスは2002年に米国FDA[注2)]に認可され、欧米の脳卒中センターですでに1000例以上の患者さんに使われており良好な結果が得られています。現在マトリックスは欧米ではかならず動物実験でトレーニング

注1) Guglielmi Detachable Coil（ググリエルミ デタッチャブル コイル）
注2) Food and Drug Administration アメリカ食品医薬品局

を受けないと使用できません。トレーニングセンターは米国ではUCLA、ヨーロッパではパリ大学が指定されておりアジア・オセアニアの拠点として慈恵医大で行う予定になっています。国内認可がまだおりていませんが近い将来慈恵医大で国内のトップレベルの先生を対象にトレーニングを開始する予定です。

第二点目のDSA画像装置ですがこれが今回慈恵医大の脳血管内治療センターの最大の特色です。これまで血管内治療は放射線診断の延長として発展した経緯よりほとんどの施設で治療は血管撮影室で行われていました。しかし治療が進歩して全身麻酔の必要なこと、より進んだ治療法の発達に適応するためには血管内治療専門の手術室が必要となってきました。我々は世界に先駆け手術室内にシーメンス社と共同開発したバイプレーン血管撮影装置を設置し、開頭手術、血管内治療どちらにも対応可能なシステムを確立しました。このシステムでは動脈瘤などの病変を立体的に画像を再構築しより安全な治療ができるようになっています。





今後の展望

今後の展望としては指導医の育成を踏まえつつ、本学において脳神経外科・神経内科・放射線部・麻酔部の協力の元、血管内治療チームを整備すると共に、世界初の専用手術室を利用して最高レベルの治療を患者さんに提供していきたいと思っています。

研究面では大学1号館に設置された血管撮影装置を有する実験室を有効に利用していきます。このGE社製の血管撮影装置はフルデジタルフラットパネルディテクターという最新鋭の画像検出装置を搭載し、アジアでは一号機が慈恵医大に設置されました。もちろん動物実験、研究用としては世界で唯一慈恵にあるだけです。我々はGE本社の研究開発チームと提携し臨床応用前段階のソフトウエアの開発評価などを行っています。すでに新しいコイルやステントなどの評価や早稲田大学と共同で慈恵発の新しいデバイスの開発に着手しており、通産省関連の研究費を獲得しています。

慈恵医大の後輩たちに強調したいことは自分の能力を信じていろいろなチャンスにチャレンジしてほしいと思います。海外の一流施設の優れているところは個々の能力を最大限に引き出すシステムができている点です。もちろんそこには競争があり恵まれたポジションは限られています。しかし可能性はゼロではなく、慈恵医大の枠にとらわれずに積極的の国内外の一流施設で経験を積んでみることも必要です。阿部教授や岡村前学長、栗原学長のように8年間も自由にやらせてくださるふところの深いリーダーが慈恵にはいるのですから。

第三部 国内外から センターに寄せられる期待

血管撮影装置のメーカーの記者発表会に50人あまりの報道陣が集まる

「脳血管内治療センター」の開設にあたって、2003年11月19日に都内のホテルで、血管撮影装置を開発したシーメンス社の記者発表会が行われました。同社の開発した新しい装置と世界で初めてその装置を導入した事例として「脳血管内治療センター」が紹介され、慈恵医大からは脳神経外科学講座の阿部俊昭教授と村山雄一センター長が講演者として出席しました。

記者発表会では、今まで2次元でしか見られなかった撮影画像が3次元でリアルタイムに再現される意義や、「脳血管内治療センター」の先進性が強調されました。また、村山センター長が指導を受けた脳血管内治療の第一人者であるカリフォルニア大学ロサンゼルス校メディカルセンター教授のフェルナンド・ヴィヌエラ博士と、フェルナンド博士の教え子であり、アルゼンチンのブエノスアイレスで脳血管内治療を行っているペドロ・リリック博士も講演し、画期的なコンセプトで作られた同センターへの期待を語られました。

また、50名以上集まった報道陣からは、センターの運営の関する質問が出るなど、新しい治療方法への社会的関心が高いことが裏付けられた記者発表会でした。

脳神経外科治療の限界を超えるために

東京慈恵会医科大学
脳神経外科学講座　教授
阿部　俊昭

日本では、常にクモ膜下出血が大きな話題になっています。発病者の約半分が死亡し、元の生活に戻れる方は3割しかいないという深刻な病気です。このクモ膜下出血は動脈瘤の破裂によって引き起こされるのですが、それを防ぐために開頭手術を行い、瘤（こぶ）の根元を紐のようなもので結ぶクリッピングという方法が採られてきました。このクリップの方法は約70種類あり、その組み合わせが約30年間にわたって脳神経外科医の腕の見せ所でした。あえて脳底動脈など難しい場所を手術することに挑戦し続ける医師がいたり、言わば名人芸の世界が存在したわけです。

この手術方法では、場所によっては手術できないことがありましたが、切らずに治すというのは、夢のような話でした。しかし、ここに来て治療技術が急速に進歩し、切らずに動脈瘤を治療することができるようになったのです。それがコイルを詰めるという脳血管内手術なのです。この手術は、どんな場所であっても治療することができ、開頭手術を必要としないため、手術も短時間で終わり、早期の社会復帰が可能になるという画期的な方法です。

私は外科的な手術に限界を感じて、新たな医療技術を修得した人材を育成するために、村山医師にUCLAに行っていただきました。それから8年間で、彼はトップレベルの専門医に成長してくれました。さらに昨年のISAT（国際破裂脳動脈瘤臨床試験）の調査結果によって、脳血管内治療の優位性が証明されたことで、世界的にも治療方法の流れが大きく変わっていることが確認できたのです。そこで、世界でも最新の施設を作り、村山先生をセンター長に迎え、慈恵医大として最先端の医療技術に取り組むために「脳血管内治療センター」が開設されました。

「脳血管内治療センター」は、時間が重要視される脳卒中に対処するために、脳血管内手術にも外科的手術にも即座に対応できる設備を備え、365日24時間の体制で治療に臨むとともに、新しいコイルのアジア・オセアニア地域唯一のトレーニングの拠点として、学内に動物実験施設を使ったトレーニングシステムを用意しました。今後、同センターには日本、アジアを中心に世界中の人々が訪れ、日本初の先進医療の拠点として活動していくことになります。（談）

近視矯正手術 レーシック（LASIK）手術

眼科学
講師 佐野 雄太

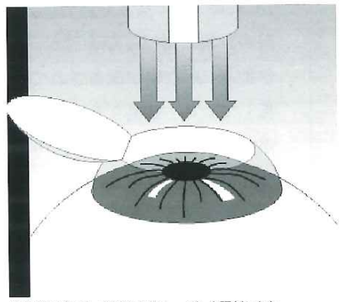
近視の方は、近くのものは良く見えますが、遠くのものはぼやけて良く見えません。これは、遠くのものの映像が、網膜よりも手前に映されてしまうためです。したがって、近視の方は遠くをみるためには、メガネやコンタクトレンズが必要となります。日本人の過半数以上が、日常生活でメガネやコンタクトレンズを使用しています。ドライアイがあるためコンタクトレンズが使用できない方や、スポーツ選手や、どうしてもメガネをかけるのが煩わしい方にとって、「裸眼で遠くがはっきりと見えたらどんなに楽だろう」、と考えるのはごく自然のことと思えます。

2001年1月に厚生労働省はエキシマレーザー装置を近視や乱視の手術目的で使用する認可を下しました。エキシマレーザーとは、角膜の形状をミクロン単位で正確に変化させることで近視の矯正ができる最新のレーザー装置です（図1）。エキシマレーザーを使用することにより、以前に行われていたメスで角膜を切開する方法と比較すると、格段に安全で、また精度も向上しました。2002年に我が国で近視のレーザー手術を受けた方は約6万人にのぼり、今後さらに増加すると予測されています。

近視の手術で現在最も多く行われているのはレーシック（LASIK）手術です。レーシック手術では、まずマイクロケラトームと呼ばれる装置で角膜の表面をうすく削り、フラップと呼ばれる角膜の蓋を作ります。フラップを裏返したあとで、露出した角膜実質をエキシマレーザーで正確に削り、再びフラップを元の位置に戻します（図2、3）。角膜にフラップを作るため、角膜表面の上皮細胞が温存され、手術精度が高くなりました。手術は点眼麻酔のみで可能であり、術中の痛みはほとんどなく、手術後も多少目がゴロゴロしたり、しみるような感じが半日ほど残る程度です。手術時間は、片目に約10分で、入院の必要もなく、約9割の人がメガネをかけずに1.0以上の視力になり得る安全で有効な手術です。

レーシック手術が現在主に行われている大きな理由のひとつに、手術翌日から裸眼視力の向上があげられます。一例を表に示しますが、手術翌日から裸眼視力が1.0以上になる割合は77%、一週間後では88%です。そのため、金曜日午後に手術を受けた方でも、3日後の月曜日午前中には社会復帰をすることが可能です。また、得られた治療効果は長期間にわたって保たれます。

さて、近視の手術を安全に行うためには、眼科専門医による手術前の精密な適応検査と、詳細な説明に基づいたインフォームドコンセントが重要です。レーシック手術が個々の患者さんに適しているかどうかを判定する術前適応検査では、角膜の状態が手術に適合しているか、水晶体や網膜に異常がないか、手術で視力向上が期待できるかを様々な精密検査装置を用いて判定します。また、手術治療である以上、起こり得る合併症を最小限にするために万全の対策がとられなければならないことはいうまでもありません。そのため、附属病院のエキシマレーザー装置は、白内障などの眼内手術と同等のクラス1万の無菌度を維持できる専用手術室に設置されました。レーザー装置は眼球の動きをとらえるシステムが組み込まれている最新型で、患者さんの眼がきょろりと動いても、ずれることなく安全にレーザーを照射することができます。附属病院のエキシマレーザー関連施設は、設備の充実度、クリーン度、広さともに国内で最高水準のものです。



（図2）角膜フラップを作成後、レーザーを照射します。再びフラップを元の位置に戻して終わる

（図1）厚生労働省の許可を受けたエキシマレーザー装置

（図3）LASIK手術

（表1）レーシックの術後視力

症例	術前裸眼視力	翌日裸眼視力	1週後裸眼視力	症例	術前裸眼視力	翌日裸眼視力	1週後裸眼視力
A	0.1	1.2	0.9	N	0.06	1.2	1.0
B	0.2	1.2	1.2	O	0.2	1.2	1.5
C	0.1	0.9	1.2	P	0.2	1.2	1.5
D	0.09	0.4	1.0	Q	0.06	1.2	1.5
E	0.07	1.2	1.5	R	0.05	1.2	1.5
F	0.08	1.5	1.2	S	0.06	0.7	1.2
G	0.06	1.5	1.0	T	0.06	0.4	0.9
H	0.03	1.5	1.5	U	0.09	0.7	0.8
I	0.07	1.0	1.5	V	0.07	1.5	2.0
J	0.07	1.2	1.5	W	0.07	0.8	1.2
K	0.07	2.0	2.0	X	0.07	1.5	2.0
L	0.07	1.5	1.5	Y	0.05	1.5	1.5
M	0.06	1.2	1.2	Z	0.05	1.0	1.2

無料説明会を定期的に行っております。
詳しくは下記ホームページ
または院内パンフレットをご覧ください。

〒105-8471　東京都港区西新橋3-19-18
■東京慈恵会医科大学附属病院
眼科エキシマレーザー屈折矯正外来
直通電話：03-5400-1254
FAX番号：03-5400-1255
■慈恵医大附属病院屈折外来ホームページ
http://www.jikei.ac.jp/hospital/honin/shinryou/jvcc.html
■眼科学教室屈折外来ホームページ
http://www.jikei.ac.jp/ophthalmology/jvcc.html

視点

歯と健康な身体について

歯科 教授　田辺　晴康

厚生労働省の「2002年簡易生命表」によれば、昨年度の日本人の平均寿命は女性が85.23歳、男性が78.32歳で、男女とも過去最高を更新した。この要因の1つは、がん、脳血管疾患などでの診断、治療が進み、死亡率が改善されているものと同省は分析している。簡易生命表とは、その年の死亡状況が変化しないと仮定して、年齢ごとに「平均してあと何年生きられるか（平均余命）」を示し、零歳児の平均余命が平均寿命になる。

話は変わるが、私たち人間の食べる機能－摂食・咀嚼・嚥下－を長期にわたり支え、生活の質の向上に貢献する器官が口腔と歯である。食物を取り入れ破砕する器官が歯で、唾液と混ぜ合わせ食塊を形づくり、嚥下させるまでが口腔の機能である。歯が失われ、咀嚼のための咬合機能が不能になると、食事そのものの行動が嫌いになり、食欲を失ってしまう。食欲は人間の四つの欲の一つで、人間が生きる中で最後まで残っている。したがって食欲を失うことは死を意味する。高齢になっても歯が多く残っていることは大切なことであり、健康の入口である口腔、そして歯を清潔に保たなければならない。

口腔疾患は、古くはう蝕（虫歯）と歯周疾患を挙げていたが、近年では顎関節障害、歯列不正、咬合不全を訴える人が少なくない。う蝕、歯周疾患の予防は歯垢の除去であり、毎食後の刷掃を充分な時間をかけて行うことである。歯を丈夫にしてう蝕にかからないようにするには、以下のことが推奨されている。

1. 歯の形成期のCa（カルシウム）の摂取量に関係する。しかしCa以外にビタミンDやたんぱく質など他の栄養素も必要になる。
   妊娠期の母親に1日1,000mgのCa摂取
   授乳期の母親は1日1,100mgのCaの摂取
   Caはご承知のとおり、牛乳や乳製品ならびに海藻類、魚介類や大豆(豆腐、納豆)に多く含まれている。
2. フッ素の利用
   厚生労働省はフッ素の希釈液0.05～0.1%のフッ化ナトリウム溶液で1日1回、約30秒間、ブクブクと口に含んで吐き出すことを薦めている。しかし、これには子供の骨の成長に悪影響があると反対の声もある。
3. キシリトールの効果
   砂糖に代わる人工甘味料としての利用とともに虫歯抑制効果があり、ひろく普及している。

歯をできるだけ残して、自分の歯で食物を咀嚼しようと80－20運動（厚生労働省が提案している運動で、これは80歳で20本の歯を残そうということ）20本の歯があれば食事に不自由なく噛むことができる。しかし現在の日本人の状態は80－8.2で前述の長寿国日本は、高齢化が進む一方で、歯の寿命はほとんどのびておらず、永久歯28本（親しらずを除く）のうち、平均すると60歳でほぼ半分の歯を失うという調査結果が出ている。このことからも以前に比べて私たちも歯を抜くことに慎重になっている。また、咀嚼を充分に行うことは咀嚼筋の運動を高め、脳への血液循環を促進させることで、成長期の顎の発育を促し、高齢者の脳の活性化を高めるといわれている。

歯の慢性疾患は時として、全身への二次感染の病巣になりうるが、口腔の異常は目で診てすぐに判断できることが少なくないため、痛みなどの症状を自覚したら早めに診察してもらうべきであるということはいうまでもない。日頃より口腔の健康保持も心がけたいものである。

「研究余話」

話し手の配慮は聞き手に伝わっているのか
ー日本語の新しいイントネーションー

人間科学教室 日本語教育研究室
助教授　野呂　幾久子

「私は南武線なので登戸↑で乗り換えなんですよ。」（↑は上昇イントネーションを表わす）

これは話し手が自分の乗換駅を説明している文であり、聞き手に質問しているわけではない。しかし「登戸」の末尾に上昇イントネーションが置かれ、質問のような印象を聞き手に与える。このように質問の意図を持たない上昇イントネーションを、10年ほど前からよく耳にするようになった。これは「半クエスチョン」と呼ばれる、日本語の新しいイントネーションである。私は数年前これに関する調査を行った。ここではその結果をもとに、話し手と聞き手の意識の乖離について考えてみたい。

半クエスチョンにはいくつかの意味がある。冒頭の文は「『登戸』という駅ですが知ってますか？」という「聞き手の理解の確認」、「僕がよく間違えるのは謙譲語↑あれなんですよ」は、「『謙譲語』という言い方で正しいですか？」という「不確かな情報の確認」、「合格したときはやったーっていう感じ↑とにかく嬉しくて…」は、「やったーっていう感じ、わかりますよね？」という「同意・共感の要求」の意味がある。しかし、半クエスチョンを使う人に使用の理由を尋ねたところ、どの種類にも共通していたのは、「聞き手に配慮しながら協調的に会話を進めようとする姿勢を示すため」ということであった。もともと上昇イントネーションには、聞き手の反応を伺うという意味があり、下降イントネーションと違って一方的伝達にならない。話し手は話の途中に上昇イントネーションを置くことで、「私は一方的に話すつもりはありません。あなた（聞き手）のことを配慮しながら協調的に話を進めています」という気持ちを表わしているのである。

ところが、それが聞き手に伝わっているかというと、残念ながらそうとは言えないようだ。聞き手への印象調査の結果を因子分析したところ、「好感」とともに「依存」「押しつけがましい」の因子が見られた。話し手の配慮や協調的姿勢を肯定的に捉えた人は「好感が持てる」と感じるが、逆にそれを「聞き手に頼っている」と否定的に捉えた人は、「依存的」と受け止めていた。また、話し手が半クエスチョンを使うと、聞き手はそのたびにうなずき・あいづちなどの反応を返さなくてはならない。これが反応返しを強制する「押しつけがましさ」と感じる聞き手もいた。このように半クエスチョンは、話し手の配慮が伝わらない、あるいは逆に、悪い印象を与えることもある話し方であることがわかった。

話し手の意識と聞き手の意識に乖離があるのは当然である。しかし半クエスチョンのように、話し手が聞き手に配慮する気持ちがあるのに、逆の印象で聞き手に受け止められることがあるのは、残念なことだと私は思う。なぜ自分の話し方が思いとは異なる印象になってしまうのか。その一つの原因は、私たちの「声や話し方への関心の薄さ」にあるように思う。私たちは毎日一回は鏡で顔を見る。自分の顔が好きだからという人もいるかもしれないが、何かついていたり汚れていたりして、他人に不快感を与えないかをチェックすることも多い。声も顔と同様、日々他人に姿をさらすものである。それなのに、毎日鏡は見ても自分の声や話し方を聞かないのは、よく考えると奇妙な話かもしれない。

一年生の「日本語表現法」の授業では、一年間に数回、全員がテープに取った自分の声を聞いている。自分の声や話し方を聞き手の立場で聞く経験を通して、自分と聞き手の意識の違いに気づき、自分の気持ちが相手に伝わる話し方になることを願っている。

名誉教授
松田　誠

第四話

論より証拠

明治18年4月14日、東京大学（東大）講堂は「脚気菌」発見の大講演会があるというので熱気にあふれていた。緒方正規（東大教授）が脚気病の原因菌を発見したというのである。大学教授、助教授、陸海軍軍医官、文部書記官、有名開業医ら大勢は、この脚気細菌説に大きな期待をよせて参集していた。とくに脚気菌の発見を待ち望んでいた陸軍軍医官の喜びようは大変なものであった。当時の軍隊は5人に2人は脚気患者だといわれるほど脚気の蔓延に困っていたのである。

一方、以前から脚気栄養説をとなえていた高木兼寛（海軍軍医、本学創設者）は、すでに脚気の原因として栄養のアンバランス（白米に偏りすぎること）を考え、それの改善（白米を麦に代えること）によって脚気病の予防、治療に成功しつつあった。そしてこの栄養説の成果が出るにつれて、緒方らはこれを黙視することができず、原因菌をもとめて研究をすすめた結果、ついに「脚気菌」を発見したというのである。だからこの発見こそは東大陸軍グループが長いあいだ待ち望んでいた大ヒットであった。

講演会の状況から察して、これはもう学術の発表会というよりは、むしろ緒方正規の顕彰会に近いものであった。ライバルになった兼寛にも発言が許されたが、それは緒方の決定的な栄養説批判に対して兼寛がどのように反論するかという興味の対象にすぎなかった。壇上に立った兼寛は、しかし、自分の栄養説を簡単に説明したのち、敢然とこう述べたのである。「日常の開業医が脚気菌を見つけるのに顕微鏡を携えて往診するのはいかにも大変であろう。しかもそれで脚気菌が見つかったとしても、その菌を撲滅できない以上、結局この説では脚気病は治せないのではないか」と。普通の反論のしかたとは違って、如何にも実学主義者らしい反論であった。普通であれば、相手の不合理な点を指摘し、自分の合理性を主張するものであるが、彼はそのような理屈は言おうとせず、簡潔に、「自分は簡単に脚気を診断できるし、また自分の改善食（麦飯）でそれを完全に治すこともできる。しかし君たちの学説では結局この病気は治せないではないか」と言っているのである。ここに「理屈よりも実際」「論より証拠」という彼の実学的な学問観、医学観がはっきり示されているのである。

幸い、この脚気細菌説は、しばらくして北里柴三郎によってその実験の不備が指摘され、おのずと消えてしまったのであるが（脚気菌は誰にも追試、確認できない幻だったのである）、それでも東大陸軍グループは、まだ兼寛の栄養説をただちに認めようとはせず、のみならずこの学説で脚気患者が激減したという確かな事実さえも否定し続けたのであった。そして結局この論争の決着は日清、日露の両戦争まで待たねばならなかった（明治28年、38年）。兵食を麦飯に改めていた海軍からは、この戦争で一人の脚気患者も出さなかったのに、相変わらず白米食を続けていた陸軍からは膨大な数の脚気患者（約30万）と死亡者（約3万）を出したのである。兼寛の栄養説の勝利は誰の目にも明らかであった。

母校セント・トーマス病院医学校で
特別講演をする高木兼寛（明治39年）

日露戦争勝利の翌明治39年、兼寛は母校セント・トーマス病院医学校（英国）に招かれて特別講演をおこなった。彼はそれまでの脚気研究の経過を、栄養の改善のことから脚気を完全に予防できたことまでを3日間にわたって事細かに話した。著名な医学雑誌ランセットがその全文を掲載したため、欧米の医学者はこの兼寛の先駆的業績に大きい衝撃を受けた。とくに栄養説の正しさを、単なる考えとしてではなく、現実の成果として示したことが極めて高く評価されたのである（ここでも「論より証拠」が評価されたのである）。

南極大陸の地名に「Takaki Promontory 高木岬」というのがあるが、これは英国の南極地名委員会が昭和39年に高木兼寛の名前をとって命名したものである。西欧の医学者にあたえた影響がいかに大きかったかが分かるのである。「高木岬」一帯の地名には「ホプキンス氷河」「エイクマン岬」「フンク氷河」など国際的に高名なビタミン学者数名の名前がつけられている。兼寛の業績はビタミン発見の先駆になったのである。

随想

国際交流

看護学科
教授　住吉 蝶子

もしも、イラン人医師と、日本人看護師がメキシコ人患者の治療ケアをすることになったら？もしも慈恵医大のＩＣＵに入院中のザンビアからの患者様のベットサイドで、同じ国からの祈祷師が、病気治癒の祈願ダンスを始めたらどうなるでしょうか？先ずは混乱することでしょう。

私はアメリカの病院で、四半世紀以上もの長い間働いてきました。国際交流という言葉を遥かに超えた、〝人類のるつぼ〟の中での毎日で、まさに前述の状況のような事の連続なのです。私が回りの人々と行動を共にするためには、私が属するグループの背後にある文化を通して物事の通常性を学習し、その事を自分のものとする、文化の共有が必要でした。

日本人は家靴と外靴の２種類の靴を持っていて、常にこれを使い分け、これを混同してしまう事は規則違反であるという情報を得た外国人は、この習慣を奇妙に思うでしょう。しかし、その外国人が日本に来る機会をもち、この家靴外靴に関する文化を理解し、その素晴らしさに共感し、この衛生的な慣習を受け入れ自分でもそれを実践することにより、家靴外靴文化の共有者となります。

私達はそれぞれ大切なものを持っています。これを価値観と言うなら、これと同じようにそれぞれの文化も異なる価値観を持っています。他者の価値観を理解するための鍵は、その人の行動を直に観察し触れることであります。私達はしばしば世界の人々を大きいグループや、一つの塊で取り上げ、その人達に対して自分が以前から持っているステレオタイプな見解を通して判断を下す傾向があります。家靴外靴の習慣を日本で体験した上記の外国人は、日本人すべてが同じ靴の習慣を実践してはいないのだという事が理解でき、以前自分が日本人に対しもっていたステレオタイプ的考えを修正することでしょう。

言葉を持って伝えられる理想的な価値観は、理解することはできます。しかし、実践や体験の中で知る価値観とは異なるでしょう。〝国際間における人々の理解〟という事だけには止まらず、人々が〝共感〟し合えるものがあるという事は、これからの国際社会においてはとても重要であると思うのです。世界経済や世界の動きがますますグローバル化する今日、異なる文化を持つ人々と共に仕事を進めるためには、異文化間にある人々の間接的対話のみでは誤解を生じやすいものです。単なる表面的な理解のみではなく、直に接して、体験し、そして共感することができるなら、言葉や行動の裏にある文化的背景からのメッセージを共有することができるはずです。この共感と共有を生み出すためにも人と人、組織と組織による国際交流が必要であると思うのです。

学内めぐり

褥瘡対策チーム

附属病院褥瘡対策チーム責任者　上出良一（皮膚科）

はじめに

褥瘡とは、床ずれのことをいいます。健康な人では、どんなに熟睡して体重で皮膚の血流がとだえても、痛みやしびれで無意識に寝返りをうつため、血行障害をおこすことはありません。身体を動かすことができないと、同じ部位が長時間（2時間以上）血流がとだえる状態におかれることにより皮膚がこわされます。これが、床ずれです。皮膚が傷つきやすく感染しやすくなっている高齢者や体力の落ちた人は床ずれができやすくなります。

褥瘡対策チーム誕生

平成14年4月の診療報酬改定で、褥瘡対策等に関する基準が新設され、①専任の医師、看護師から構成される褥瘡対策チームの設置、②診療計画書の作成と運用、③体圧分散式マットレス等の設置と適切な選択と使用が要件となりました。これを満たさない場合褥瘡対策未実施減算として、1患者、1日当たり5点の減算が行われ、未実施による年間収入減額は附属病院だけでも1,680万円と推定されました。附属病院では既に3名の専門看護師（WOC認定看護師※）が院内で活動をしており、また、第三病院でも早くから褥瘡対策委員会が立ち上げられており、褥瘡回診などを通じて対策を行っておりましたが、これを機に平成14年7月、急遽4病院でそれぞれ褥瘡対策チームが設置され、活動を開始しました。

褥瘡対策チームの活動

対策チームは医師（皮膚科、リハビリテーション科、呼吸器内科、形成外科）、看護部、薬剤部、栄養部、病院管理課から構成されています。さらに各病棟には褥瘡リンクナースが配置され、各診療科では褥瘡担当医師が決められています。対策チームとしてまず、「褥瘡対策に関する診療計画書」を作成し運用開始しました。それをもとに褥瘡患者の月別の発生率を把握し、また患者リストを作成して、週1回、金曜日午後、情報共有が十分に図れたメンバーで褥瘡回診を実施しています。

また褥瘡対策指針（ガイドラインライン）を作成し病棟へ配付すると共に、月1回、褥瘡の発生リスクの高い病棟に出向いて褥瘡予防ケアの勉強会を開催しております。ここへは医師の参加を求めておりますが、まだまだ少数であることが残念です。さらに、慈恵4病院の褥瘡ケアの向上を目的として、年1回慈恵医大褥瘡セミナーを開催し、各病院からの報告と外部講師による特別講演を行っています。

褥瘡は予防が第一

褥瘡はできてしまったものの治療より、まずは発生リスクを予測して、どう予防するかが最大の課題です。附属病院のような特定機能病院では、いわゆる老人病院とは異なり、ICUなどの急性期病棟での発生率の高さが特徴です。手術の成功が最優先されることは当然のことですが、術後管理における褥瘡発生を避けるべく、看護師任せではなく、医師の積極的な関与が求められます。

褥瘡発生率が低下した

平成14年10月に活動を開始した当時、褥瘡発生率は5%でしたが、15年8月には2%と大幅に減少し、かつ褥瘡も浅いものがほとんどとなりました。入院時既に褥瘡を有していた症例を差し引けば、当院入院後の発生率は1.6%です。このことは院内における褥瘡対策への関心の高まりの成果と評価されます。しかし、未だ新規発生はゼロではありません。そのひとつの理由として体圧分散マットの絶対数の不足があります。各病棟の特性に応じた適正なマットの購入、配備を緊急に行う必要があります。かつては「褥瘡を作るのは看護の恥」といわれていましたが、現在では「病院の恥」です。また、包括医療の中、褥瘡の治療費はどこから得るのでしょうか？一旦できてしまった褥瘡のケアには多大の看護力が割かれます。貴重な人的資源の無駄遣いにもなっています。

今後の課題

今後、体圧分散寝具の充実、診療計画書のデータベース化、治療薬・被覆材・手術の適応ガイドライン作成、院内における啓発・教育活動の推進、学術活動の活性化など多数の課題を抱えており、ひとつひとつ実行に移していきたいと考えております。褥瘡発生ゼロを目指して、院内の組織横断性に多職能の混合チームとしての和を大切にしつつ、活動を続けていきたいと思います。

※WOC：
Wound care, Ostomy, Continenceの略で日本看護協会の認定資格

◀附属病院褥瘡対策チーム

第三病院に新手術棟完成し運用開始

附属第三病院（狛江）の新しい顔、「新手術棟」が完成し、平成15年8月より運用を開始しました。建物は現在の病院北側狛江通り沿いに増築され、各階が既存の建物と連結した4階建てで延床面積は約2500㎡であります。

1階には最新の手術器具自動消毒システム（ウオッシャーデイスインフェクターシステム）を備えた滅菌室・中央材料室があり、2階が集中治療病棟で、特に重要な治療期間をすこしでも安らいで療養できるよう、採光に恵まれた広い空間の中に全6床（隔離室1床）のベットが配置されています。また、すべての大型医療機器は天井吊架アームに搭載されるためエアコントロールとともに清潔度の高い集中治療スペースとなっています。

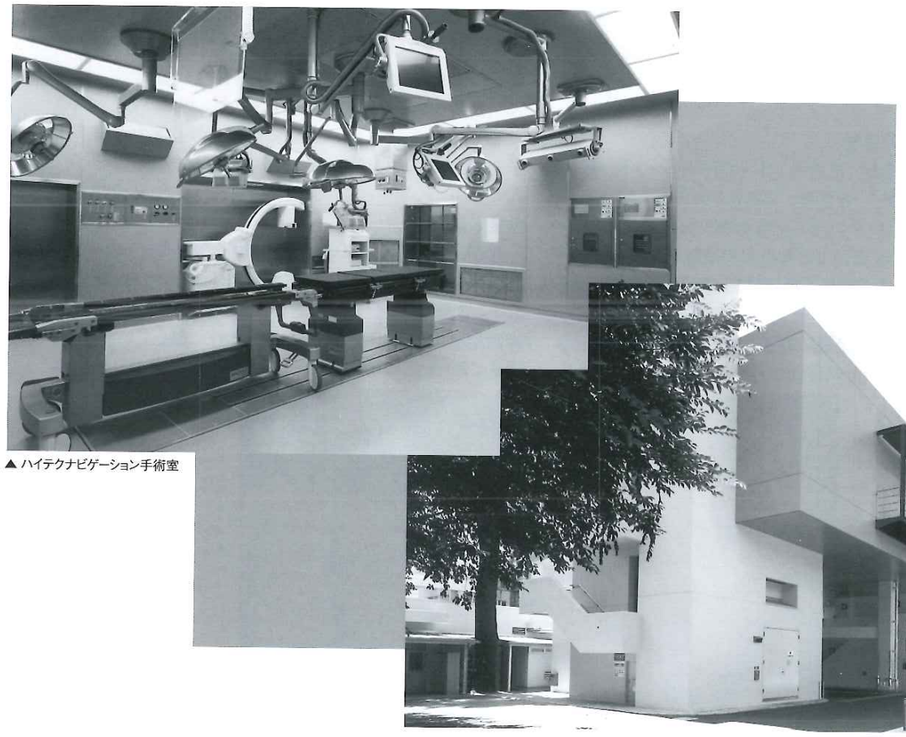
3階が手術室棟となり、9手術室が広い廊下に直線的に配置されています。内2室はいわゆるバイオクリーンルームで脳神経外科・整形外科など高度の清潔度を要求される手術で使用されます。また吊架型モニターを複数装備した内視鏡手術専用ルーム、陰圧換気の特殊感染症対応手術室なども設置されています。

特に第9手術室は正式名「ハイテクナビゲーション手術室」といいます。ここは第三病院の敷地内にある世界でも有数の医用コンピュータ画像技術の研究所（高次元医用画像研究所）の技術を直接患者さんの安全な手術に役立たせるための特殊な手術室です。特にバーチャルリアリティ技術を実際の手術に導入できる世界で初めての手術室でもあります。

検査室まで移動しなくても手術台のままCTをとることが出来るCアームCTも常設されています。さまざまな手術ナビゲーションシステムが装備され、光ケーブルで結ばれた高次元医用画像研究所での多様な処理画像を直接術野にリアルタイムで表示し、効率的かつ安全な近未来の手術が第三病院で可能となります。

今後、平成16年3月末まで旧手術室の改築が続いて行われ、ゆとりあるナースセンター・回復室などに生まれ変わります。日帰り手術・一泊入院手術への体制なども整備し、多様な地域中核病院への要望にお応えしていきます。

（第三病院　副院長　坂井春男）



▲ハイテクナビゲーション手術室

▼手術室全景

恵和会創立70周年

慈恵看護専門学校　教育主事
興梠　清美

去る8月24日、ホテルオークラ「平安の間」において恵和会総会と恵和会創立70周年記念式典を開催いたしました。総会冒頭「慈恵の看護教育と恵和会のあゆみ」について山梨大学大学院教授坪井良子先生（7期生）に講演を行っていただきました。日本初の看護教育所として設立以来今日までの118年の慈恵看護教育の歴史に改めて触れられ、会員一同慈恵で学んだことの喜びと、同窓の絆をさらに強く感じました。

総会に引き続き70周年を記念し、三笠宮寛仁親王殿下のご臨席を賜り「我が国の福祉と癌を語る」の特別講演を拝聴いたしました。8月上旬に殿下がご入院されたことを聞き及び、ご容体を案じておりましたが、殿下は術後の翌日からリハビリに励まれ講演に備えられていたとのことでした。特別講演の内容は、治療生活を克服されていることを通してテキストには書かれていない多くの看護上の関わりや障害者への思いを時にユーモアを交え熱く語られました。大学からは栗原理事長をはじめ、三専務理事、四学校長のご出席をいただきました。その後の記念パーティーでは、懐かしい顔ぶれで会話も弾み、会場は和やかな雰囲気で親睦が深まり、盛会のうちに終了いたしました。

昭和8年の創立以来70周年を迎えられましたのもひとえに皆々様のご指導の賜物と感謝いたしております。70年の歴史を礎に恵和会の更なる発展を目指し会員一同努力してまいりたいと思います。

◆◆◆

挨拶する塚本恵和会会長

三笠宮寛仁親王殿下の特別講演

栗原理事長ならびに塚本会長を囲んで

The JIKEI NEWS FLASH

学内ニュース

特色ある大学教育支援プログラムの選定を受けて

慈恵医大総合試験システム

文部科学省が平成15年度から始めた「特色ある大学教育支援プログラム」に東京慈恵会医科大学の取組「医療者（専門職業職者）育成のための学習評価システム」が選定されました。

文部科学省はこの事業の目的について以下のような説明をしています。「特色ある大学教育支援プログラムは、大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものを選定し、選定された事例を広く社会に情報提供することで、今後の高等教育の改善に活用します。これにより、国公私立大学を通じ、教育改善の取組について、各大学及び教員のインセンティブになるとともに、他大学の取組の参考になり、高等教育の活性化が促進されることを目的とするものです」。すなわち、慈恵医大の教育実践がわが国の他大学の先端を行っていることが広く認められた訳です。

慈恵医大の取組の概要は、「評価とは学生へのメッセージである。評価というフィードバックを通じ、学生は大学が決めたスクールミッションで求められる能力を獲得していく。従来の教育システムでは、科目担当者が学生を教え、試験を作り、採点し、合否判定を行ってきた。この教育の密室性（教育者＝評価者）と科目の独立性が大学での一貫教育を妨げてきた。本学の統合カリキュラムでは、教育実施組織と評価組織を完全に分けることで、教育者≠評価者のシステムを採用している（総合試験システム）。このシステムでは教育者がどれだけの成果を学生に与えたかを大学が評価することで、教育者の教育責任の明確化を行い、さらに試験問題をデータベースとして大学が一元管理することで、6年一貫のカリキュラム全体を管理することが可能となった。医療者をはじめ専門職業職者の教育では、各科目、各学年での学生の能力の着実な積み上げが必要である（構造化されたカリキュラム）。本学の取組は、責任あるカリキュラム管理の実践の具体例である」です。

これに対し、慈恵医大の取組が採択された理由は、「この取組は、東京慈恵会医科大学の教育目標である「高い診療能力をもつ臨床医の育成」を実現するために、東京慈恵会医科大学の医学部教授会の審議を経て、すでに7年にわたって組織的に実施されている取組であり、関係者の努力によって当初目標とした総合試験により教育の質を保証するなどに大きな成果をあげてきています。この取組は特に、全国の医学部・歯学部で行われている臨床実習開始前の共用試験システムのCBTのモデルとなっているなど優れた特色があり、他大学の参考となる事例です」と通知されました。

選定されたのは「慈恵医大総合試験システム」です。平成8年度のカリキュラム改革で導入が決定され、平成9年度からコンピュータシステムが稼働しました。今年度はこのコンピュータシステムを大幅に改修しています。このようなコンピュータシステムを1大学が単独に開発できたのは、教員だけではなく、システム課、学務課をはじめとする事務系職員の血と汗と涙があったからです。この取組には、これからの教育とは教員と職員の共同作業であるという主張も込められているのです。慈恵医大の教育についての考え方が、全国で実施されている共用試験に受け継がれ、わが国の医療者教育の質の向上に向かっていることをご報告いたします。

（医学教育研究室　教授　福島　統）

受験生・ご父兄に期待を伝える良い機会に

東京慈恵会医科大学説明会

◀医学部医学科の説明会

医学科

去る平成15年8月9日（土）の午後1時30分より西新橋校中央講堂で医学部医学科大学説明会が開催されました。当日は台風10号の影響で風雨が強まっていたにも拘らず参加された方々は510名を数えました。受験生をはじめご父兄ならびに進学指導関係の方々が入口で配付された資料に目を通されている姿が2階席、3階席に散見されました。

説明会は、最初に栗原敏学長より「本学の理念と期待する学生」について説明があり、本学は、豊かな人間性とバランスのとれた知識と技術を身につけている良き臨床医、および研究の目的をよく理解して、深い知識と斬新な実験技術を十分に駆使し、オリジナリティのある研究を行うことができる、良識ある医学研究者を養成する大学である。また自ら医学の道を選び入学してくる学生諸君に期待しているといった内容が述べられました。続いて川村将弘教学委員長より、臓器別・機能別統合カリキュラムをはじめ、時代に即応した卒前・卒後教育の内容についてスライドを写しながら説明が行われました。その後、阿部俊昭大学広報委員長より、本学諸施設についてスライドを使っての紹介と併せて海外留学に関する実績報告が行われ、続いて1年生から5年生の代表医学生6名が壇上に上がり、入学前と入学後の感想、クラブ・サークル活動報告、日々の勉強への取り組みなどについて阿部俊昭大学広報委員長と対話形式で現況報告が行われました。最後に受験上の諸注意事項に関する説明が行われた後、質疑応答の時間が設けられ、午後5時に閉会となりました。

説明会終了後は、希望者による大学1号館の見学会も行われました。なお、平成16年度・医学部医学科の大学説明会の日程は平成16年8月7日（土）に開催する予定で内容の見直しなども含め検討しております。

看護学科

去る平成15年7月22日（火）、医学部看護学科の大学説明会・見学会が午後2時より看護学科大教室で開催されました。当日参加された方々は130名となり、大教室内は立錐の余地もないくらい満席の状態でありました。

河野洋子助教授が司会を担当され，栗原敏学長より『当大学が目指すもの』芳賀佐和子教学委員長からは「本学の看護教育の特徴」に関する説明が行われました。引続きベラ食堂、体育館、実習室などの諸施設がスクリーンに写し出され、4年生の真田紀子さんより説明が加えられました。また在学生の学園生活として1年生の篠塚美佐紀さんより、入試問題の傾向と対策、4年生の小松純恵さんからも日々の授業をはじめクラブ活動について具体的な内容が話され、集まった方々は興味深く聞き入っている様子が窺えました。ちなみに篠塚さん、小松さんはともに空手部に所属されているとのことでした。

その後、興村慎也主務より受験上の注意事項に関する説明がありました。休憩をとった後、看護学科の校舎見学および看護体験コーナーに移り、各10人づつの班編成が組まれ、パソコン教室、医学情報センターなどの施設見学および血圧測定や車椅子の体験や老年看護、小児看護などの各コーナーで看護教員の方々より種々の説明がありました。会場内は和やかな雰囲気が漂い、最後に希望される方々に個別相談会が行われた説明会でありました。

▲看護体験の説明風景

◀看護学科大教室における説明会

先進活用事例を経済産業省が見学

カルテ所在管理システムの施設見学

去る平成15年8月20日、水曜日、午後4時より5時30分まで附属病院（本院）のカルテ所在管理システムで採用されたS-ラベル（カルテBOXに貼り付けたRFタグ）の活用事例について経済産業省 商務情報政策局 情報政策課の3名の方々による施設見学がありました。

この見学は、同省よりカルテ搬送の実態とその成果について見学希望があり、医療情報部・根岸部長に申し出があったものです。当日は、根岸部長をはじめ情報技術研究室・能勢課長補佐、外来中央カルテ室・水野係長より大学第1会議室において全般的な概略説明が行われ、続いて施設見学が行われました。地下1階の中央カルテ室ではカルテの出入庫管理の実際ならびに総合診療部の外来端末機を使用したデモンストレーションが行われました。概ね1時間30分で終了となりましたが、経済産業省の方々は、デジタルカメラで室内をはじめ各機器などの記録写真を撮られ、終了となりました。

◀▲施設見学の様子

「穆園館」開館セレモニー開催される

宮崎県高岡町福祉保健センター「穆園館」

平成15年5月30日、宮崎県高岡町に「福祉保健センター穆園館」が完成し、落成記念行事が開催されました。この施設は、幅広い年令層にわたる健康相談や各種の検診や健康増進ならびに子育て支援など住む人々の健康づくりの拠点として利用されるとのことです。

この式典には、招待者・関係者を含め約200名が出席され、開館を祝いました。記念行事には、高木兼寛先生のひ孫にあたられる高木公寛氏（高木家代表）ならびに高木敬三専務理事が招待を受け、出席されました。

開館セレモニー前のイベントでは、エレクトーン演奏と高岡中央保育園児によるキーボードや太鼓を使っての演奏が披露されました。続いて、9時30分からの開館セレモニーでは記念のテープカットが行われ、吉元正憲町長より主催者を代表して「町民の健康づくりなどの場として、末永く愛される施設にしていきたい」とご挨拶があり、落成記念行事が幕を開けました。

10時からは会場が移され、「落成記念式典・講演会」が行われました。式典で高木敬三専務理事から「21世紀のキーワードである『人と心の健康』これらを含めて『共存共栄』を目指そうとしている穆園館を今後は地域の核として大いに発展することを願います」との祝辞が述べられた落成記念行事でした。

◀開館を祝うテープカットの様子

地域の期待に応えて女性専用外来を開設

柏病院女性専用外来

柏病院は、千葉県および柏市からの呼びかけを受け、平成15年9月より、週1回の女性専用外来を開設しました。千葉県では、厚生労働省の健康日本21を受けその都道府県版である、健康ちば21を作成し、保健医療政策の一環として女性専用外来を県内各地に設置することにしました。柏市の含まれる東葛北部地域には、このような外来がないことから、開設は大いに期待されていました。

千葉県の疫学調査によれば、女性の死亡率は男性に比して心疾患や脳血管障害が多く、さらに閉経後の女性の高コレステロール血症の頻度が男性より高いことが認められています。一方、65歳未満の働き盛りの女性では、がんによる死亡率が著しく高く、特に乳がんが多く、全国で4位と高率でした。また15歳から30歳代までの女性はカルシウム摂取量が標準を下回っており、骨粗鬆症の予防を考えると注目される結果でありました。

以上より男女の性差を考慮することにより、女性のための医療がより明確化され、さらに女性スタッフのみによって診療が行われ、面接時間を30分とするなど、通常の治療とは異なる外来となっております。毎週月曜日の午後、内科と精神神経科の2名の女性医師が交互に担当しておりますが、開設早々から予約は多く、相談内容は、多岐にわたっており、今後一層の充実に取り組む予定でおります。

▲女性医師による対応

“響”をテーマに参加者の心に情熱を届ける

慈恵祭開催

▲看護学科受付担当の皆さん

平成15年10月31日～11月2日にかけて恒例の「慈恵祭」が開催されました。医学科、看護学科の共催は今年で7年目になり、企画内容は学生が自ら企画し、運営する学園祭となっています。

今年のテーマは“響”で、医学科・小松大悟実行委員長のメッセージによりますと「今年の慈恵祭をどのようにしたらより多くの参加者に楽しんでもらえるだろうか、この問いに答えを出すべく、試行錯誤をしてまいりました。その努力、情熱が少しでも参加者の心に響けばと思い、今年のテーマにしました」と、また看護学科・小坂井里恵実行委員長は「人と人が心を響かせあうことができたらいいと思います。またすべての人に、人の心に自分の想いを響かせる努力をすることを忘れないでほしい」と慈恵祭ガイド「JIKEI FESTIVAL '03」で抱負が述べられていました。

毎年、この慈恵祭の最終日には講演会が開催されていますが、これは医療の分野に関わる講演となっています。今年は、「心ある医療を実践できるには」という内容がメインテーマで、演者は、川崎市立川崎病院・鈴木厚先生ならびに堂園メディカルハウス院長・堂園晴彦先生でした。

鈴木先生は、日本の医療制度の問題点について諸外国とのデータ比較などを取り入れられ「日本の医療費は安すぎる」との主張に基づく講演内容でした。堂園先生は鹿児島県で運営されているホスピス医療やNPO「風に立つライオン」の活動内容の講演でした。後半には本学・医学科3年の入村雄也君が同NPOの派遣員としてインドカルカッタにおけるボランティア活動・身寄りのない子供たちの施設や患者の清拭や食事の介護など感動溢れる実体験報告がありました。両先生の講演中にメモを取る人たちも多く、また感心して聞き入っている様子が窺えました。

講演終了後、質疑応答の時間も設けられ、活発な質問が寄せられ、終了は午後4時10分になりました。

先生方は講演後の予定があったにも関わらず、質問が出つくすまで応じてくださり、まさに会場内には“響きあい”が溢れた講演会でありました。

▼▶蘇生モデルを使っての心臓マッサージ訓練

▲鈴木、堂園先生の講演が行われた会場

St. Thomas医学校選択実習生のfeedback report

海外交流委員会 委員　福田　国彦

平成15年度は、Rishi Goel君、林　大地君、King Tin Tsang君、Tiffanie Khooさん、Winnie Loさんの5名が慈恵医大において選択実習を行いました。Rishi Goel君は救急部（8月11日～9月5日）、林　大地君は放射線部（8月4日～8月29日）、呼吸器内科（9月1日～9月26日）、King Tin Tsang君は神経内科（8月11日～9月5日）、脳神経外科（9月8日～10月3日）、Tiffanie Khooさんは産婦人科（8月4日～8月29日）、小児科（9月1日～9月11日）、Winnie Loさんは小児科（8月4日～8月29日）、救急部（9月1日～9月26日）でした。8月18日には栗原学長を表敬訪問し、日英の医学教育事情などについて意見を交換しました。

彼らの滞在にあたり学務課の大黒さん、病院管理課の林さんに大変お骨折りいただいた。また、彼らの宿舎については、看護婦寮の舎監さんに今年も大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。大きな事故も無く、慈恵での実習と日本での生活を楽しみ、沢山の友人をつくって帰国した4名の学生から私の元に学生実習レポートが届いております。彼らの了解を得ましたので、ここに実習報告書（一部抜粋）を掲載いたします。

I applied to Jikei University Hospital for two placements during my elective period, namely neurology and neurosurgery. This was because I am very interested in these areas, and I wanted to experience the advanced technology in these fields in Japan.

（中略）

My first placement was neurology. I was introduced to the professor and all the staff of the department, including the nurses on the ward. This made me feel that I was part of the team, and was therefore much appreciated. I was given two patients to look after, basically following them up everyday checking their progression. All the doctors and nurses were very helpful indeed. They always helped me when I wanted to talk to the patients (because of my poor Japanese), and whenever a doctor had time, he/she would teach me on various things including examination of the patient, looking at scans or explaining the patient's conditions. They also showed me patients other than the two I was given, so I was able to gain a very wide view of the neurology department (such as Wallenburg Syndrome, multiple system atrophy, Parkinson's, CNS lymphoma etc.). In addition, I had the chance to observe various tests such as EEGs, other electrophysiological studies and radiological interventions such as MRI scanning and angiography. I enjoyed my stay in neurology very much mainly because I was given so much help.

（中略）

Lastly, I want to say I had an excellent time travelling around Japan as well. I was able to find time to, not only look around Tokyo, but also go to other cities such as Kyoto, Nara, Hiroshima, Yokohama etc. They were all very different from one another, ranging from very modern cities to very traditional Japanese styles. I had a great time, and could not really think of a better way to have spent this elective.

King Tin Tsang

I have thoroughly enjoyed my stay in Tokyo and studying at Jikei hospital. I worked for about 4 weeks in the ER department. My week consisted of 3 day shifts and 1 night shift. I found the hours to be quite difficult at first but the doctors allowed me to be somewhat flexible with them. The night shifts were particularly useful for me because I got to see some more interesting cases.

I found the language barrier to be a bit of a hindrance sometimes in the ER. Most of the doctors and nurses speak excellent English and would always go out of their way to explain things to me. However, although I have picked up a little Japanese I found it impossible to communicate and take a history from patients. In hindsight, I wish I'd learnt some formal Japanese!

The staff and Dr. Anzawa and Prof. Ogawa have been exceptionally kind to me. I feel I have learnt a lot about the Japanese healthcare system and how it functions. I had hoped to partake in more procedures in the ER but apparently this is not allowed for students. One recommendation I would make for future students in the ER is perhaps, if possible, allow them to do more in the ER and be more actively involved with the patients.

The housing accommodation was superb. I found it had every amenity I needed and my stay there was very comfortable.

Thank you for allowing me to study at Jikei. I feel I have learnt a lot about the healthcare system here and have enjoyed traveling around Tokyo and Japan very much.

Rishi Goel

Despite having been to Japan twice before, the 6-week experience in Jikei was unique. It was a rare window of opportunity for a foreigner to taste the life of a Japanese doctor. True to the nature of the profession, it also brought the opportunity to interact with different kinds of people - nurses, as part of a health care team; patients, with their perspectives of disease and role of doctors; doctors as mentors and health care providers; and students as colleagues and friends. The variety and cultural differences created a palette of colours with hues that painted vivid portraits of memories.

（中略）

Just as impressive is the strong sense of team spirit in Jikei. Nurses are indispensable assistants to the doctors; and doctors work cohesively as a team, supporting each other, with seniors looking after residents with concern and care. Such working conditions made my stint in the hospital most memorable, feeling a sense of belonging in a team.

（中略）

I found the obstetric department typically busy, but also with a lot more administrative work - the trademark of Japanese medicine. The urgent nature of obstetrics combined with the doctors' poorer command of English made it harder for me to participate actively. But through great effort from both parties, Jikei's obstetric department has a wealth of complicated pregnancies which helped me cement foundations in the subject. I was also taught the principles of ultrasound and how to visualize and monitor the unborn foetus which I really enjoyed.

（中略）

The time spent in Jikei was a worthwhile experience which I enjoyed, and will treasure as rare experience. It has left me with a wish to return to Japan and work alongside many of the people I have met.

Tiffanie Khoo

交換留学制度を利用して慈恵に来る決心をしたのは昨年の秋、私がセント・トーマス医学校在学五年目のことだった。（中略）漠然と日本に行きたいと思ってはいたが、まだ決心しかねていた丁度その時、King's College Hospitalで慈恵の医師が短期研修中という情報が入ってきた。私は当時産婦人科実習中だったが、その合間をぬって肝臓移植部門を訪れると、そこにいらしたのがDr. Emi Saegusa（現在は慈恵本院整形外科研修医）だった。肝臓移植チームの超人的スケジュールをこなし、大変お疲れのところを申し訳ないと思いながらもアポイントメントを取り、慈恵や日本の医療について色々なお話を伺うことが出来た。これで私の心は決まり、すぐに慈恵への留学を申請し、無事承認された。（中略）

ここで、わたしが行った研修内容について触れておきたい。まず、放射線部では、画像診断部に籍を置き、主に読影室で画像診断に参加させてもらいながら、放射線治療、核医学、超音波、IVRも経験することが出来た。また、御茶ノ水の画像診断センターや都立荏原病院放射線科でも研修させていただき、日本の医局制度の実態を垣間見ることが出来た。次に、呼吸器内科では、病棟、外来、遺伝子治療部実験室などを見させていただくと同時に、現役学生と一緒にポリクリや講義、CPCを経験することが出来た。また学外での研究会にも参加することが出来、大変充実した時間を過ごせた。（中略）

最後に、この二ヶ月間お世話になった先生方にお礼を申し上げたい。学長先生、そして理事の先生方からは温かい励ましのお言葉とともに、書籍「白い航跡」や高木兼寛生誕百五十周年記念の写真たてをいただき、慈恵の歴史について学ぶことが出来た。阿部前学長先生には御著書をいただくと同時に、「病気を診ずして人を診よ」という教えの由来についてお話を伺うことが出来た。（中略）今後も学生レベル、そして医師レベルでの慈恵とセント・トーマスの交流が益々発展していくことを願い、この留学感想文を終わりたい。

Daichi Alex Hayashi

史料室の説明を受ける実習生の皆さん

ホームスティで学祖のふるさとを知る

第1回穆園先生ふるさと再発見の旅

昨年11月7日（金）から9日（日）の3日間にわたり、医学科の学生4名が学祖・高木兼寛先生の出身地である宮崎県高岡町に滞在し、ホームスティを通して学祖とふるさとの強い結びつきを知る旅を経験しました。この旅行は、慈恵医大との交流を深めたいと考えた高岡町穆園国際交流会（BEAT）のお招きに応えて実現したもので、参加者は改めて、学祖の偉大さと、今なお、ふるさとから名士として慕われていることを実感することができました。

参加者の声

穆園先生の故郷を訪ねて

この度はBEATの方々にお誘い頂き、慈恵医大の学生の一員として、宮崎県高岡町を訪ねてきました。我々の学祖である高木兼寛先生の生まれ故郷である、高岡町や穆佐の人達は優しく、温かく、本当に良い人達でした。

何より驚いたのは、高岡町（とくに穆佐の人々）の人々は本当に深く兼寛先生の事を理解しているということでした。小・中学校の9年間で、兼寛先生の教科書を用いてみっちりと生き様や思想を学ぶのです。

また、今回招待して頂いたBEATの方々の歓迎も驚きと共に大変喜ばしく、そして楽しいものでした。町長までいらして下さったWelcome PartyやBEATの人々の家にお邪魔させて頂いたホームステイ。高岡町観光や、（我らが兼寛先生が建立した宮崎大神宮参拝等）、非常に心に残るような事ばかりの旅でした。

この交流会で一番感じた事は、西新橋から遠く離れた宮崎県高岡町に、私たちと同じく高木兼寛先生の意志を継ぐ人々がいるという事がとても嬉しかったです。この第1回目の交流を軸として、高岡町と慈恵医大との親交がより深まっていくように願っております。

最後になりましたが、今回ご招待して下さったBEAT会長の藤井さん、ステイ先としてお世話になった岩切さん、そして会員の皆さん、本当に楽しくて素敵な交流会をありがとうございました。

医学科2年　星野　優

◆

今回の第1回穆園先生ふるさとの旅にて新しい発見をしたことがたくさんあります。それはわれらが学祖の高木兼寛先生がこんなにも慕われている高岡町という町があること、そして兼寛先生が医療以外にも様々な活躍をなされていたということです。

兼寛先生のことについてこんなにじっくりと学ぶ機会というものがなかなかなかっただけに改めて我が学祖の偉大さを知らされました。また様々な食べ物のおいしさも発見のひとつです。地鶏に芋焼酎にチーズ鰻頭、みかんにきゅうり …。こんなにもいろいろおいしいものがあったのかと感銘を受けた旅でもありました。今回我が慈恵医大の学祖のふるさとにお招きいただき、高岡町のいろいろな場所に連れて行って頂きありがとうございました。

来年、再来年もこの交流が続き新たに自分と同じ体験をして、すこしでも兼寛先生について、高岡町について、世界観を広げられる仲間が一人でも増えればと願っています。

医学科3年　今北　智則

◀参加者の皆さん

宮崎県高岡町を訪れて

今回、学祖高木兼寛先生が生まれ育った地、宮崎県高岡町を訪れる機会をいただいた。この機会をいただいたことにより、兼寛先生の業績について改めて学びなおすことができ、また同時に先生が生まれ育った地についても僅かながら知ることができたと思う。現地では、BEATや顕彰会の方々に高岡町を案内していただいたのだが、そこで感銘を受けたことがある。それは、先生が亡くなられてから150余年という長い月日を経た今もなお、お年寄りから子供まで、幅広い年齢層に対して「夢」を与え続けていたことである。私たちは医学生であるためか、先生の医学における業績にのみ目をとらわれがちである。しかし、高岡の方々はそうではなかった。先生は、子供たちからも人間として尊敬され、夢を与え続けていたのである。このような素晴らしい先生が創設してくださったこの東京慈恵会医科大学で学ぶことができることに改めて感謝するとともに、誇りに思う。

最後になりましたが、この貴重な機会を用意してくださった藤井さん、岩切さん、清水さん、福永さんを始めBEATの方々、中原さんをはじめ顕彰会の方々、高岡町長の吉元さん、穆佐小学校校長先生、そして高岡町の皆様に、改めて心から感謝し、お礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

医学科4年　元山　智恵

◆

宮崎・ふるさとの旅を振り返って

11／9日曜日午後6時、空路羽田へ無事戻ってきた。飛行機から外に出ると、風がひんやりしていた。

我々慈恵医大の学生4人は去る11／7金曜日の夕方、宮崎の地へやって来た。その気候はとても‘あったかく’、今思えば高岡町の方々の心と通じる気がする。高岡町では、我々が到着するや否や熱烈な歓迎会を受けたのをはじめ、3日間に渡って本当に色々世話になった。それぞれ皆さん仕事、家庭があるにもかかわらず。一介の学生に過ぎない我々をである。

私は東京に生まれ育ち25年になるが、今まで出会ってきた人たちの多くは自分が一番可愛くて、直接自分の為になること以外には興味を示さず、ましてやそんなものに時間・金を費やそうとはしなかったし、自分もそれが当然だと考えていた。そんな私の常識をいい意味で高岡町の方々は覆してくれたのである。

ただしやはり恩に着れば恩で返すのが礼というものである。何らかの形で微力ながら今後の高岡町のご発展に関わっていければ幸いである。

BEATの方々、特に私のホームステイ先の福永さんご一家（福永さんの台詞「美辞麗句はいらない」サイコーでした）、会長の藤井さん、清水さん、バイクに生まれて初めて乗せてもらった岩切さん（いつか絶対バイクで宮崎行きます）、顕彰会の中原先生、高岡町長の吉元さん、穆小の校長先生、歓迎会に一品料理持ちこみで来て下さった全ての方々たち、そして高岡町の全ての方々へ、改めてお礼申し上げます。どうもありがとうございました！

医学科4年　村野賢一郎

公開セミナー・地域連携フォーラムを各地で開催

一般市民対象の健康講座

■第24回慈恵医大夏季セミナー（日本医師会生涯教育講座）

平成15年8月2日（土）午後4時より大学1号館3階講堂において「第24回慈恵医大夏季セミナー」が開催されました。開会にあたり森山寛生涯学習センター長より挨拶ならびに今回の司会を担当された精神神経科牛島定信教授の紹介がありました。なお、本セミナーは、例年8月の第4週に開催されていましたが、今年度は、より多くの同窓の先生方に参加を頂けるのではないかと、試験的に初旬の開催を試みたとのことでした。その後、牛島教授の司会により、次のとおりストレスに関連するセミナーが進行されました。なお、参加された方々は91名で、アンケートによりたくさんのご意見を参考にしながら、森山寛生涯学習センター長を中心に今後の開催時期をはじめ種々検討してまいりますと事務局よりコメントがありました。

「第24回慈恵医大夏季セミナー」

司会　牛島　定信　教授（精神神経科）

1. ストレスとホルモン
   東條　克能 講師（糖尿病・代謝・内分泌内科）
2. ストレスと消化器病変
   鳥居　明 講師（消化器・肝臓内科）
3. ストレスと血管病変
   谷口　郁夫 助教授（循環器内科）
4. ストレスとめまい
   石井　正則 助教授（耳鼻咽喉科）
5. ストレスとアトピー皮膚炎
   上出　良一 助教授（皮膚科）
6. ストレスと軽症うつ病
   中山　和彦 助教授（精神神経科）
7. 総合討論

■青戸病院公開健康セミナー

青戸病院では地域一般住民を対象に健康維持・病気の予防援助を目的に、身近で関心の高い生活習慣病や老化に伴う病態や疾患をテーマに取り上げ、5月と11月の年2回葛飾区医師会共催、葛飾区後援にてJR亀有駅前の亀有地区センターで開催しています。回を重ねるごとに地域住民の関心も高まり、参加者から好評を得ています。第15回公開健康セミナーは、下記の通り開催されましたが約150名の参加者がありました。

●平成15年11月8日（土）　午後2時～午後4時
●亀有地区センター
テーマ：「がんの早期発見と予防法」
演　題：
1.「消化器がん（食道・胃・大腸）の疫学と生活環境について」
　附属青戸病院 外科　山本　真司
2.「婦人科がん健診」
　附属青戸病院 産婦人科　森　裕紀子
3.「がん撲滅落語」
　林家　時蔵
4.「がんの予防体操」
　（株）東京アスレチッククラブ　小澤　孝
5.「煙草と肺がん」
　附属青戸病院 呼吸器感染症内科　児島　章

■第三病院公開健康セミナー

平成15年6月28日（土）、10月11日（土）と第三看護専門学校6階大教室にて第14回・15回第三病院公開健康セミナーが開催されました。第14回では、「口と歯の健康」と題しまして、歯科診療部長・伊介昭弘講師による講演が行われました。当日は天候が思わしくなく27名の参加者でありましたが、参加者にわかりやすい内容でとても満足されたようです。第15回では、「緑内障を正しく理解しましょう」と題しまして、眼科診療部長・常岡寛講師による講演が行われ、53名の参加がありました。アンケートから「大変有意義な時間を過ごしました。」「ありがとうございました。」などの感想が多くあり、とても好評でした。第16回第三病院公開健康セミナーは、平成16年3月13日（土）にテーマ「骨と筋肉の健康」と題しまして開催予定です。皆様のご参加をお待ちしております。

■柏病院地域連携フォーラム

柏病院では平成15年11月8日（土）に、柏市、柏地区医師会の後援により第4回地域医療連携フォーラムを柏看護専門学校講堂において開催しました。今回は「公開健康講座」の形式で、“糖尿病教室”と題し地区医師会の先生方や市民の方を対象に企画しました。第1部には「医療連携で取組む糖尿病」、第2部には「当院における糖尿病診療」と約3時間にわたり、最後に柏地区医師会長の三坂　直温先生にご挨拶を頂き閉会しました。

地区医師会、市民、当院受診の患者さま及び入院中の患者さま、教職員を含め総勢162名の参加者となり、市民や患者さまからも多くの質問をいただき、当院としても、引き続き質の高い医療を提供していくことを改めて痛感させられた価値ある公開健康講座となりました。詳細は下記の通りです。

●平成15年11月8日（土）午後1時30分～午後4時
●慈恵柏看護専門学校　講堂
演題
第1部　「医療連携で取組む糖尿病」
1）糖尿病診療における地域連携の重要性
　糖尿病・代謝・内分泌内科 診療部長　佐々木　敬
2）糖尿病とはどのような病気か
　糖尿病・代謝・内分泌内科 医師　宮下　弓
3）糖尿病のスクリーニングと治療における検査
　臨床検査技師　遠藤　いづみ
第2部　「当院における糖尿病診療」
1）糖尿病の教育入院　運動療法と日常生活の留意点
　看護師　播磨　亜紀、河野　彩子
2）糖尿病とおくすり
　薬剤師　森　祐子
3）健康的な食生活と糖尿病
　管理栄養士　岡村　康平

生涯学習

生涯学習センターをはじめとする各機関では、生涯学習のために
セミナーやフォーラムなどさまざまな取り組みを行っています。

慈恵医大生涯学習センター

●慈恵医大生涯学習セミナー

月例セミナーと夏季セミナーを開催し、受講者には「日本医師会生涯教育講座参加証（シール）」を交付しています。

■月例セミナー／開催日時：毎月第2土曜日（休日を除く）
16:00～18:00（但し、1月、8月、10月、12月を除く）

場　　所：慈恵大学病院中央棟8階会議室

回数	月日(曜)	テーマ	講師名
135	2月14日（土）	**血液がんと日常診療 ー増えている血液がんの現況ー**	血液・腫瘍内科 **薄井 紀子 助教授**（司会：港区 今村典嗣 先生）
136	3月13日（土）	**嚥下障害の評価と リハビリテーション**	リハビリテーション科 **安保 雅博 講師**（司会：国分寺市 山口 真佐恵 先生）

平成16年度4月以降の開催日

4月10日（土）、5月8日（土）、6月12日（土）、7月10日（土）を予定しています。

（主催）慈恵医大生涯学習センター

■夏季セミナー

毎月8月に開催し、約100名が受講されています。

（主催）慈恵医大生涯学習センター
（共催）慈恵医大同窓会、慈恵医師会、港区医師会

◎お問合せ先：慈恵医大生涯学習センター
電話：03－3433－1111（大代表）内線2634

慈恵医師会

●慈恵医師会産業医研修会

7月19日（土）の開催を予定しています。

（主催）慈恵医師会、（共催）東京都医師会で開催し、受講者には「日本医師会産業医認定シール」を交付しています。

◎お問合せ先：慈恵医師会
電話：03－3433－1111（大代表）内線2636

青戸病院

●青戸病院公開健康セミナー

葛飾区医師会共催、葛飾区後援にて区民を対象とした公開健康セミナーを毎年5月と11月に亀有地区センター（JR亀有駅南口駅前リリオ館7階）にて開催しています。

●青戸病院症例検討会（CPC）

近隣医師と教職員を対象におおよそ2ヶ月に1度症例検討会を開催しています。

●メディカルカンファレンス

近隣医師と教職員を対象に6月と3月にメディカルカンファレンスを開催しています。

◎お問合せ先：青戸病院　総務課
電話：03－3603－2111（大代表）内線2671

第三病院

●第三病院公開健康セミナー

年3回、第三看護専門学校大教室にて、市民を対象に健康講座を開催しています。

●調布市市内大学公開講座

毎年11月末から12月ごろ、調布市文化会館たづくり大会議場にて、市民を対象に健康講座を開催しています。

●第三病院医療連携フォーラム

近隣医師と教職員を対象に、最新医療や医療問題その他のフォーラムを開催しています。

◎お問合せ先：第三病院　総務課
電話：03－3480－1151（大代表）内線3711

柏病院

●柏病院症例検討会（CPC）

近隣医師と教職員を対象に、6月と11月の年2回症例検討会を開催しています。

●柏病院地域医療連携フォーラム

近隣医師と教職員を対象に、地域医療の連携についてフォーラムを開催しています。

◎お問合せ先：柏病院　総務課
電話：04－7164－1111（大代表）内線2185

JIKEI BULLETIN BOARD

大学公報のまとめ

行事

BULLETIN BOARD

1．平成15年度第2回学位記授与式が、6月16日（月）午後2時30分より、学長応接室において挙行された。
授与された者　大学院修了者　3名
論文提出者　12名
計　15名

1．平成15年度第3回学位記授与式が、9月16日（火）午後2時30分より、学長応接室において挙行された。
授与された者　大学院修了者　2名
論文提出者　16名
計　18名

1．平成16年度大学院入学試験が、次の通り行われた。
平成15年9月13日（土）　第1次募集
合格者　20名

1．10月4日（土）第57回同窓会支部長会議が開催された。

1．10月9日（木）、10日（金）の両日、第120回成医会が開催された。

1．10月11日（土）学長はじめ教授会代表、学生会代表が学祖 高木兼寛先生の墓参をされた。

1．10月28日（火）午後1時より芝増上寺に於いて第99回解剖諸霊位供養法会が挙行された。

1．平成15年度第4回学位記授与式が、11月17日（月）午後2時30分より、学長応接室において挙行された。
授与された者　論文提出者　14名
計　14名

補助金・助成金
BULLETIN BOARD

平成16年度　科学研究費補助金申請状況一覧

平成16年度・文部科学省科学研究費補助金申請状況一覧

種　目	16年度		
	新規	継続	計
特定領域研究	10	2	12
特別研究促進費	0	0	0
基盤研究（S）	1	0	1
基盤研究（A）	3	1	4
基盤研究（B）	30	5	35
基盤研究（C）	241	29	270
萌芽研究	132	2	134
若手研究（A）	3	0	3
若手研究（B）	193	30	223
合　計	613	69	682

公示
BULLETIN BOARD

平成15年4月1日
1. 太田 有史氏に、附属柏病院皮膚科診療部長を命ずる。

平成15年6月1日
1. 谷口 正幸氏に、附属第三病院循環器内科診療部長を命ずる。
1. 阿部 俊昭教授に、DSA運営委員会委員長を命ずる。
1. 景山 茂教授（定員外）に、GMP対応施設運営委員会委員長を命ずる。

平成15年7月1日
1. 上野 晃憲氏に、客員教授を委嘱する。（DDS研究所在職中）
1. 小林 正之氏に、附属柏病院中央検査部診療部長（兼任）を命ずる。
1. 和田 鉄郎氏に、附属青戸病院泌尿器科診療部長代行を命ずる。
1. 附属病院診療部門に、脳血管内治療部を新設する。
1. 附属病院中央診療部門に外来棟手術センターを新設し、外来棟手術室、皮膚レーザ治療室、エキシマレーザー手術室を置く。
1. 坂本 佳美看護師（附属柏病院）は、平成15年6月5日、北千住駅構内転落事故に際し、迅速･的確な救護処置を行い救命した功労に対し、千住消防署より消防総監感謝状が贈られました。本学では、就業規則第96条（善行）に基づき、理事長より表彰されました。

平成15年7月11日
1. 川田 忠良氏に、学校法人慈恵大学理事を命ずる。（平成15年6月1日付）
1. 國府田 守雄氏、足立 信一氏、富井 純子氏に、学校法人慈恵大学評議員を命ずる。（平成15年6月1日付）

平成15年7月24日
1. 山内 暢子看護師（附属病院）は、平成15年7月8日、神保町駅構内で発生した傷病者に対し、積極かつ適切な応急救護を行ったとして、神田消防署より感謝状が贈られました。本学では、就業規則第96条（善行）に基づき、理事長より表彰されました。

平成15年7月31日
1. 岡村 哲夫理事長は、平成15年7月31日付で理事長職を辞任され、引き続き理事として執務します。
   栗原 敏学長は、平成15年8月1日付で理事長を兼務します。

平成15年8月1日
1. 鈴木 荘一氏に、客員教授を委嘱する。
1. 松村 幸司氏に、客員教授を委嘱する。
1. 斎藤 博久助教授（派遣中）に、客員教授を委嘱する。

平成15年9月1日
1. 村山 雄一氏に、附属病院脳血管内治療部診療部長を命ずる。
1. 小山 照幸氏に、附属青戸病院リハビリテーション科診療部長を命ずる。
1. 和田 靖之氏に、附属柏病院小児科診療部長代行を命ずる。

平成15年9月26日
1. 附属青戸病院医療事故に係る「学校法人慈恵大学危機対策委員会」を設置する。
1. 附属青戸病院に「危機対策本部」を設置する。

平成15年10月1日
1. 矢永 勝彦氏に、附属病院肝胆膵外科診療部長を命ずる。
1. 小林 進氏に、附属病院手術部診療部長（肝胆膵外科診療副部長兼務）を命ずる。
1. 法橋 建助教授（定員外）に教授（定員外）を命ずる。
1. 武田 信彬助教授（定員外）に教授（定員外）を命ずる。

平成15年11月1日
1. 馬目 佳信氏に、DNA医学研究所分子細胞生物研究部部長を命ずる。

平成15年11月12日
1. 東京慈恵会医科大学長に栗原　敏教授が再選されました。

平成15年11月15日
1. 附属青戸病院長落合 和彦氏、願により附属青戸病院長の職を解く。

平成15年11月16日
1. 臼井 信男氏に、附属青戸病院長業務代行を命ずる。

平成15年11月26日
1. 吉田 末子整備員（附属第三病院物品管理課）は、医学教育等関係業務功労者として、文部科学大臣より表彰されました。

平成15年11月27日
1. 附属機関長が下記の通り選定されました。（就任年月日　平成16年4月1日）
   附属病院長　　教授　森山 寛
   医学情報センター長　　教授　清水 英佑

平成15年11月29日
1. 故伊坪 喜八郎客員教授の外科学教室葬が増上寺に於いて執り行われた。

平成15年11月30日
1. 附属病院泌尿器科診療部長大石 幸彦氏、願により附属病院泌尿器科診療部長（附属四病院総括責任者）の職を解く。

学事
BULLETIN BOARD

■大学院修了者

15.6.11　劉　丹
15.11.12　大川　豊　高木　祐子　炭山　和毅
15.11.26　水野　泰　孝上野　里程

■学位論文通過者

15.6.11　田中　純子　三尾　寧　加藤　慎一
15.6.25　川嶋　治　高橋　明　坂本　和彦　林　典宏
15.7.9　蓮田　聡夫　荒木　崇　田中　雄一郎
15.7.23　高橋　千佳子　古田　昭　松岡　美佳
15.9.10　武田　邦彦　後藤田　聡子　古賀　聖名子　茂呂　八千世
15.9.24　三宮　正久　小林　雅夫　丹羽　晴久
15.10.8　島田　青佳　添田　一弘　木島　洋征　寺尾　亨
　　三條　明　檜垣　有司
15.11.12　古島　寛之　松永　裕紀子　今井　貴　橋本　健一
15.11.26　瀬嵐　康之　和泉　武彦　鷹橋　伸子　服部　麻木
　　富井　雅人　鴻　信義

慶弔
BULLETIN BOARD

訃報

1．船橋　知也客員教授（眼科学）は、7月20日逝去されました。

1．石井　愼一助手（呼吸器内科）は、7月21日逝去されました。

1．栗原　正江寄宿舎管理員（法人事務局人事部人事課）は、病気療養中のところ9月5日逝去されました。

1．下平　昭治主務（附属病院放射線部）は、病気療養中のところ、11月5日逝去されました。

1．伊坪喜八郎客員教授（元外科学教授）は、病気療養中のところ、11月13日逝去されました。

人事
BULLETIN BOARD

教員（医学科）

■教授

内科学
15.10.1　法橋　建　（外）
　　武田　信彬　（外）

■客員教授

DDS研究所
15.7.1　上野　晃憲

小児科学
15.8.1　斎藤　博久

■助教授

内科学
15.7.1　高木　一郎
15.8.1　加地　正伸　（派）

放射線医学
15.9.1　関谷　透

脳神経外科学
15.10.1　尾上　尚志　（外）

泌尿器科学
15.10.1　近藤　直弥　（派）

眼科学
15.8.1　敷島　敬悟

耳鼻咽喉科学
15.10.1　加藤　孝邦

■講師

微生物学第1
15.11.1　馬目　佳信

内科学
15.7.1　吉田　正樹
　　伊藤　哲志　（派）
15.8.1　吉田　博
15.9.1　青木　薫　（無）

精神医学
15.7.1　小曽根基裕
　　西村　浩　（無）

小児科学
15.10.1　津田　隆

外科学
15.10.1　田部　昭博　（派）
　　三好　勲　（派）
15.11.1　吉澤　穣治

整形外科学
15.7.1　小谷野康彦　（無）
15.10.1　辻　美智子

脳神経外科学
15.11.1　澤内　聡

産婦人科学
15.10.1　西井　寛

眼科学
15.8.1　仲泊　聡　（派）
15.10.1　林　孝彰
　　田中　雄一郎　（派）

麻酔科学
15.8.1　藤原　千江子

■助手

アイソトープ実験研究施設
15.9.1　箕輪　はるか

内科学
15.7.1　小田　彩
　　福田　実
　　齋藤　晃
　　森　力
　　馬場　仁
　　小野田　泰
　　坂本　和彦　（無）
　　二上　敏樹　（無）
　　伊藤　周二　（無）
　　伏谷　直　（無）
　　桑田　雅雄　（無）
　　小林　英之　（無）
　　坪田　昭人　（無）
15.8.1　久能　守
　　安澤　龍宏
　　伊藤　高史　（無）
15.9.1　笠間　絹代
　　平川　吾郎
　　伊達　太郎
15.10.1　吉村　和修
　　原　洋一郎
　　井坂　剛
　　斎藤　桂介
　　近藤　誠　（無）
　　石川　威夫　（無）

精神医学
15.7.1　佐藤　幹
　　矢野　勝治
　　大渕　敬太　（無）

小児科学
15.7.1　水野　泰孝
　　野崎　和之
　　千葉　康之　（無）
15.9.1　柴田　淳
　　丹　愛子　（無）

皮膚科学
15.7.1　長井　泰樹
　　延山　嘉眞
　　谷野　千鶴子　（無）

放射線医学
15.10.1　三角　茂樹
　　成尾　孝一郎　（無）
　　我那覇文清　（無）

外科学
15.7.1　諏訪　勝仁
　　緒方　直人
　　大久保辰雄
　　佐野　芳史
　　高橋　直人
　　矢島　浩　（無）
　　松平　秀樹　（無）
　　大平　寛典　（無）
　　池尻　真康　（無）
　　三好　勲　（無）
　　二川　康郎　（無）
15.8.1　川野　勧
15.9.1　根岸　由香
　　衛藤　謙
　　西川　勝則
15.10.1　根岸　由香　（無）

整形外科学
15.7.1　辻　美智子
　　中野　信宏
　　黒坂　大三郎
　　石橋　嘉津雄　（無）
　　石坂　淳　（無）

脳神経外科学
15.7.1　北島　具秀
　　田中　俊英
　　寺尾　亨　（無）
15.9.1　北島　具秀　（無）
15.11.1　石井　卓也
　　田母神　令

形成外科学
15.7.1　赤松　久子　（無）

産婦人科学
15.7.1　鶴岡　三知男
　　古賀　良一　（無）
15.9.1　茂木　真

泌尿器科学
15.7.1　菅谷　真吾　（無）

眼科学
15.7.1　高橋　寧子　（無）
15.10.1　仲泊　聡
　　浅川　晋宏　（無）

耳鼻咽喉科学
15.7.1　内田　亮
　　福田　佳三
　　丹羽　洋二　（無）
15.9.1　松脇　由典

リハビリテーション医学
15.7.1　上久保　毅
　　瀬田　拓
　　高田　耕太郎
　　植松　海雲　（無）
　　星野　寛倫　（無）

歯科
15.7.1　吉田　奈穂子

■医員

内科学
15.7.1　鳥巣　勇一
　　田中　康之
15.10.1　間森　聡
15.11.1　植村　信之
　　山路　朋久

精神医学
15.7.1　杉村　共英

小児科学
15.7.1　湯坐　有希
　　布山　裕一
　　河合　利尚

皮膚科学
15.8.1　堀　香織

放射線医学
15.9.1　三角　茂樹

外科学
15.7.1　井上　聡

脳神経外科学
15.7.1　冨井　雅人

産婦人科学
15.10.1　小澤　真帆

（無）＝無給、（派）＝派遣中、（外）＝定員外、（非）＝非常勤、院単取得＝大学院単位取得者

出向

■助教授

15.11.1 晴海トリトンクリニック（本院） 関谷 透 放射線医学

■講師

15.10.1 晴海トリトンクリニック（本院） 蔵田 英明 内科学

■助手

15.7.1 救急部（柏病院） 鳥海 久乃 外科学
救急部（本院） 藤田 明彦 外科学
救急部（本院） 矢野 健太郎 外科学
救急部（本院） 長田 正久 内科学

■医員

15.7.1 救急部（柏病院） 齋藤 晃 内科学
15.8.1 救急部（本院） 安澤 龍宏 内科学

■大学院単位取得者

15.7.1 感染制御部（本院） 水野 泰孝 小児科学

出向解除

■講師

15.7.1 中央検査部（柏病院） 立石 修 臨床検査医学

■助手

15.7.1 救急部（本院） 相良 憲彦 内科学
病院病理部（本院） 藤田 明彦 外科学
救急部（本院） 山形 哲也 外科学
救急部（本院） 大平 寛典 外科学
救急部（柏病院） 平出 周 整形外科学
15.8.1 救急部（本院） 武田 聡 内科学
感染制御部（本院） 小松崎 眞 皮膚科学
15.10.1 救急部（本院） 齋藤 勝也 内科学
15.11.1 救急部（柏病院） 池田 真仁 内科学
健康医学センター（本院） 塩谷 尚志 外科学
救急部（柏病院） 横山 正人 外科学

■医員

15.7.1 麻酔部（柏病院） 中井 太一 歯科
麻酔部（第三病院） 岡本 太一 歯科
15.11.1 救急部（柏病院） 植村 信之 内科学

派遣

厚木市立病院
15.7.1 講師 西村 浩 精神医学
助手 伊藤 周二 内科学
菅谷 真吾 泌尿器科学
15.8.1 助手(無) 田中 知行 外科学
15.10.1 助手 間森 聡 内科学

春日部中央総合病院
15.7.1 助手(無) 石井 義縁 外科学

神奈川県衛生看護専門学校附属病院
15.7.1 助手(無) 加藤 伸樹 泌尿器科学
15.9.1 助手 丹 愛子 小児科学
15.10.1 助教授(派) 岡田 和久 内科学

神奈川リハビリテーション病院
15.10.1 助手 浅川 晋宏 眼科学

金町中央病院
15.10.1 助手 根岸 由香 外科学

川口市立医療センター
15.10.1 助手 近藤 誠 内科学

国立西埼玉中央病院
15.7.1 助手 二上 敏樹 内科学
桑田 雅雄 内科学

埼玉県立小児医療センター
15.7.1 助手(無) 池松 かおり 小児科学

賛育会病院
15.7.1 助手 池尻 真康 外科学

社会保険大宮総合病院
15.7.1 助手 古賀 良一 産婦人科学

湘南病院
15.7.1 助手(無) 山根 茂雄 精神医学

関病院
15.8.1 助手 伊藤 高史 内科学

全日本空輸
15.10.1 講師(派) 島田 敏樹 内科学

同愛記念病院
15.7.1 助手 丹羽 洋二 耳鼻咽喉科学

東急病院
15.7.1 講師 小谷野康彦 整形外科学
助手 坂本 和彦 内科学
三好 勲 外科学
高橋 寧子 眼科学
石橋 嘉津雄 整形外科学

東京都リハビリテーション病院
15.7.1 助手 植松 海雲 リハビリテーション医学
星野 寛倫 リハビリテーション医学

都職青山病院
15.7.1 助手(無) 斎藤 浩哉 整形外科学

都立大塚病院
15.7.1 助手 千葉 康之 小児科学

東大宮総合病院
15.7.1 助手 寺尾 亨 脳神経外科学

東川口病院
15.7.1 助手 谷野 千鶴子 皮膚科学

富士市立中央病院
15.7.1 助手(無) 小俣 貴嗣 小児科学
助手 矢島 浩 外科学
石坂 淳 整形外科学
赤松 久子 形成外科学
15.9.1 講師 青木 薫 内科学
15.10.1 助手 石川 威夫 内科学
成尾 孝一郎 放射線医学

町田市民病院
15.7.1 助教授(派) 村井 隆三 外科学
助手 伏谷 直 内科学
松平 秀樹 外科学
大平 寛典 外科学

松下電器東京健康管理センター
15.7.1 助手 大渕 敬太 精神医学

守谷慶友病院
15.7.1 講授(派) 鈴木 旦磨 外科学

派遣解除

厚木市立病院
15.7.1 助手(無) 馬場 仁 内科学
小野田 泰 内科学
山根 茂雄 精神医学
小俣 貴嗣 小児科学
田中 俊英 脳神経外科学
加藤 伸樹 泌尿器科学
15.8.1 医員 川野 勧 外科学

大森赤十字病院
15.11.1 医員 田母神 令 脳神経外科学

春日部中央総合病院
15.7.1 助手(無) 佐野 芳史 外科学

神奈川県衛生看護専門学校附属病院
15.9.1 大学院単位取得者 髙畠 典子 小児科学
15.10.1 講師(派) 島田 敏樹 内科学

神奈川リハビリテーション病院
15.7.1 助手(無) 上久保 毅 リハビリテーション医学
15.10.1 講師(派) 仲泊 聡 眼科学

川口市立医療センター
15.10.1 医員 原 洋一郎 内科学

河津浜病院
15.7.1 医員 佐藤 幹 精神医学

川西病院
15.7.1 助手(無) 中野 信宏 整形外科学

国立相模原病院
15.7.1 助手(無) 池松 かおり 小児科学

国立佐倉病院
15.10.1 医員 吉村 和修 内科学

国立成育医療センター
15.9.1 助手(無) 柴田 淳 小児科学

国立西埼玉中央病院
15.7.1 医員 齋藤 晃 内科学
助手(無) 大久保辰雄 外科学

国立療養所東宇都宮病院
15.10.1 助教授(派) 岡田 和久 内科学

越谷吉伸病院
15.7.1 助手(無) 杉村 共英 精神医学

埼玉県立小児医療センター
15.7.1 助手(無) 河合 利尚 小児科学

社会保険大宮総合病院
15.7.1 講師(派) 鈴木 旦磨 外科学
鶴岡 三知男 産婦人科学
助手(無) 内田 亮 耳鼻咽喉科学
15.9.1 客員教授 関谷 透 放射線医学

社会保険桜ヶ丘総合病院
15.7.1 助手(無) 黒坂 大三郎 整形外科学

湘南病院
15.7.1 医員 矢野 勝治 精神医学

関病院
15.8.1 医員 久能 守 内科学

(無)＝無給、(派)＝派遣中、(外)＝定員外、(非)＝非常勤、院単取得＝大学院単位取得者

同愛記念病院
15.7.1 助手(無) 福田 佳三 耳鼻咽喉科学

東急病院
15.7.1 助教授(派) 村井 隆三 外科学
医員 小田 彩 内科学
助手(無) 斎藤 浩哉 整形外科学

東京逓信病院
15.7.1 助手(無) 瀬田 拓 リハビリテーション医学

東京都リハビリテーション病院
15.7.1 医員 高田 耕太郎 リハビリテーション医学

都職青山病院
15.7.1 講師(派) 辻 美智子 整形外科学

都立荏原病院
15.9.1 助手(無) 三角 茂樹 放射線医学

東大宮総合病院
15.7.1 助手(無) 北島 具秀 脳神経外科学

東川口病院
15.7.1 助手(無) 延山 嘉眞 皮膚科学

富士市立中央病院
15.7.1 医員 諏訪 勝仁 外科学
15.10.1 助手(無) 齋藤 桂介 内科学
15.11.1 医員 石井 卓也 脳神経外科学

町田市民病院
15.7.1 医員 福田 実 内科学
講師(派) 緒方 直人 外科学
助手(無) 長井 泰樹 皮膚科学
高橋 直人 外科学

横浜総合病院
15.7.1 院単取得 水野 泰孝 小児科学

平成15年度講師（西新橋校）（非常勤）

環境保健医学 瀬上 清貴
15.7.1 薬物治療学研究室 山本 純子
心臓外科学 江木 秀斗
15.8.1 小児科学 所 敏治
15.10.1 形成外科学 小森 成
臨床医学研究所 伊達 昌孝
15.11.1 リハビリテーション医学 杉本 淳

平成15年度講師（国領校）（非常勤）

15.10.1 ドイツ語 武藤 陽子

依願解職

■助教授

15.9.30 青木 和博 耳鼻咽喉科学

■助教授（派遣中）

15.9.30 宮島 真之 内科学

■講師

15.7.31 立石 修 臨床検査医学
15.8.31 中田 哲也 内科学

■講師（派遣中）

15.6.30 辛島 仁 内科学
近藤 泉 泌尿器科学
杉本 淳 リハビリテーション医学

■講師（非常勤）

15.9.30 今井 敦 ドイツ語

■助手

15.6.30 阿部 文 内科学
吉田 成美 小児科学
山崎 典子 皮膚科学
金田 利明 外科学
田中 眞希 整形外科学
濱田 幸雄 耳鼻咽喉科学
15.7.31 長 剛正 外科学
15.8.31 柏木 秀彦 内科学
15.9.30 有木 則文 法医学
笠間 絹代 内科学
杉本 伸子 精神医学

■助手（無給）

15.6.30 羽根田雅郎 整形外科学
初海 宏 整形外科学
小池 健 眼科学
櫻井 淑男 麻酔科学
15.7.31 遠藤 利彦 形成外科学
15.9.30 加藤 明徳 内科学

■医員

12.3.31 天門 義琇 精神医学
15.7.31 児玉 純子 歯科
15.8.31 竹川 充 脳神経外科学
14.9.30 奥山 早苗 内科学
15.10.31 岡本 太一 歯科

■専攻生

15.8.31 美田 敏宏 内科学
15.9.30 稲玉 英輔 内科学

死亡解職

■客員教授

15.7.20 舩橋 知也 大学直属
15.11.13 伊坪 喜八郎 大学直属

■助手（無給）

15.7.21 石井 慎一 内科学

教員（看護学科）

■助教授

基礎看護学2
15.10.1 大石 杉乃

(無)＝無給、(派)＝派遣中、(外)＝定員外、(非)＝非常勤、院単取得＝大学院単位取得者

レジデント

■助手

内科
15.7.1 大城戸一郎
石黒 晴哉
遠藤 聡
飯田 里菜子
15.9.1 清水 健一郎
15.10.1 荒瀬 聡史

精神医学
15.7.1 昼間 洋平
落合 結介
小高 文聰 (無)
15.10.1 小幡 こず恵

小児科
15.6.1 田口 貴子 (無)
15.7.1 長島 達郎
田村 英一郎
齋藤 亮太
野矢 三樹 (無)
15.9.1 横井 健太郎

皮膚科
15.7.1 井上 眞理子 (無)

放射線医学
15.10.1 成田 賢一

外科
15.7.1 中村 能人
安藤 精貴
林 武徳
伊藤 隆介
小菅 誠
15.11.1 山崎 一也
林 武徳

整形外科
15.7.1 笠間 憲太郎
澤井 崇博 (無)
小池 裕人 (無)

脳神経外科
15.11.1 加藤 正高 (無)
田屋 圭介 (無)

形成外科
15.7.1 森 克哉

眼科
15.7.1 田中 格
加藤 秀紀
高濱 倫子

耳鼻咽喉科
15.7.1 落合 文
山本 和央 (無)

リハビリテーション医学
15.7.1 巷野 昌子 (無)

■医員

内科
15.8.1 柴山 健理

精神医学
15.7.1 小幡 こず恵

外科
15.9.1 山崎 一也
林 武徳

出向

■助手

15.7.1 内視鏡部(本院) 山崎 一也 外科
救急部(柏病院) 篠原 光 整形外科
麻酔部(青戸病院) 竹内 智一 眼科
麻酔部(柏病院) 濱 孝憲 耳鼻咽喉科
15.10.1 救急部(本院) 遠藤 聡 内科
救急部(本院) 飯沼 敏朗 内科
麻酔部(青戸病院) 小笠原幹英 眼科
麻酔部(柏病院) 長尾 哲兵 耳鼻咽喉科
放射線部(本院) 益子 貴博 内視鏡科
15.11.1 救急部(柏病院) 坂本 太郎 外科

■医員

15.7.1 救急部(本院) 石黒 晴哉 内科
内視鏡部(青戸病院) 林 武徳 外科
麻酔部(本院) 阿南 匡 外科
救急部(柏病院) 野秋 朗多 外科
臨床医学研究所(柏病院) 松井 道大 心臓外科
15.10.1 麻酔部(本院) 小笠原幹英 眼科

出向解除

■助手

15.7.1 救急部(本院) 豊田 千純子 内科
救急部(柏病院) 益井 芳文 内科
麻酔部(第三病院) 小池 裕人 整形外科
麻酔部(青戸病院) 山本 和央 耳鼻咽喉科
15.10.1 救急部(本院) 石黒 晴哉 内科
麻酔部(青戸病院) 竹内 智一 眼科
麻酔部(本院) 小笠原幹英 眼科
麻酔部(柏病院) 濱 孝憲 耳鼻咽喉科

■医員

15.7.1 麻酔部(本院) 加藤 秀紀 眼科

派遣

厚木市立病院
15.7.1 医員 安江 英晴 外科
毛利 貴 外科
立嶋 智 脳神経外科
河内 貞貴 小児科
15.9.1 助手(無) 野矢 三樹 小児科

岩手県立遠野病院
15.7.1 医員 小島 純也 耳鼻咽喉科

大森赤十字病院
15.11.1 助手 加藤 正高 脳神経外科

春日部中央総合病院
15.7.1 医員 大橋 仁志 外科

神奈川県衛生看護専門学校附属病院
15.7.1 助手 小池 裕人 整形外科
医員 中島 紳太郎 外科

神奈川リハビリテーション病院
15.7.1 医員 岡本 隆嗣 リハビリテーション医学

川口市立医療センター
15.7.1 医員 濱口 敬子 外科

川崎市立川崎病院
15.7.1 医員 満山 喜宣 外科

川西病院
15.7.1 助手 澤井 崇博 整形外科

国立相模原病院
15.7.1 助手(無) 井口 正道 小児科

国立西埼玉中央病院
15.7.1 助手(無) 小林 克敏 外科

国立療養所東宇都宮病院
15.7.1 医員 稲垣 卓也 外科

越谷吉伸病院
15.7.1 医員 青木 公義 精神医学

社会保険桜ヶ丘総合病院
15.7.1 医員 久宮 輔 整形外科

東京歯科大学市川総合病院
15.7.1 医員 長友 真理子 耳鼻咽喉科

東京逓信病院
15.7.1 助手 巷野 昌子 リハビリテーション医学

東京労災病院
15.7.1 医員 田中 聡 眼科

都立大塚病院
15.7.1 医員 岡野 恵里香 小児科

都立清瀬病院
15.6.1 助手 田口 貴子 小児科

富士市立中央病院
15.7.1 助手 山本 和央 耳鼻咽喉科
医員 佐々木敏行 外科
土田 茂樹 外科
阿南 匡 外科
15.11.1 助手 田屋 圭介 脳神経外科

町田市民病院
15.7.1 助手 小高 文聰 精神医学
井上 眞理子 皮膚科
助手(無) 三宅 亮 外科
医員 矢部 三男 外科

横浜総合病院
15.7.1 助手 野矢 三樹 小児科

派遣解除

厚木市立病院
15.7.1 医員 濱口 敬子 外科
15.9.1 医員 横井 健太郎 小児科

岩手県立遠野病院
15.7.1 助手(無) 落合 文 耳鼻咽喉科

春日部中央総合病院
15.7.1 助手(無) 小林 克敏 外科

神奈川県衛生看護専門学校附属病院
15.7.1 医員 河内 貞貴 小児科

川口市立医療センター
15.7.1 助手(無) 三宅 亮 外科

川崎市立川崎病院
15.7.1 医員 矢部 三男 外科

国立西埼玉中央病院
15.5.1 医員 満山 喜宣 外科

国立療養所東宇都宮病院
15.7.1 医員 佐々木敏行 外科

埼玉県立小児医療センター
15.6.1 医員 松井 道大 心臓外科

社会保険大宮総合病院
15.7.1 医員 林 武徳 外科

東京歯科大学市川総合病院
15.7.1 医員 小島 純也 耳鼻咽喉科

東京労災病院
15.7.1 派遣解除 高濱 倫子 眼科

都立大塚病院
15.7.1 医員 岡本 隆嗣 リハビリテーション医学

富士市立中央病院
15.7.1 助手(無) 井口 正道 小児科
医員 岡野 恵里香 小児科
阿南 匡 外科
毛利 貴 外科
加藤 秀紀 眼科
長友 真理子 耳鼻咽喉科
森 克哉 形成外科
15.10.1 助手(無) 成田 賢一 放射線医学

町田市民病院
15.7.1 医員 中村 能人 外科
伊藤 隆介 外科

横浜総合病院
15.9.1 助手(無) 野矢 三樹 小児科

依願解職

■助手

15.6.30 後藤 恭代 眼科
15.9.30 荒川 わかな リハビリテーション医学

(無)=無給、(派)=派遣中、(外)=定員外、(非)=非常勤、院単取得=大学院単位取得者

職員

新採用

情報広報室

15.10.1　事務員・システム課
　岩崎　和幸

法人事務局

15.4.1　事務員・経理課
　土屋　直美

15.4.1　看護教員・慈恵看護専門学校
　前田　聡子

大学

15.4.1　研究技術員・アイソトープ実験施設
　會場　由起

15.4.1　研究技術員・病理学
　五味　正樹

15.4.1　研究補助員・生理学第1
　田口　美香

15.4.1　研究補助員・国領校
　上野　絵里加

本院

15.4.1　栄養士・栄養部
　井川　ゆき子　中川　恵美　長島　かずき

15.4.1　看護師・看護部
　赤堀　千佳子　秋元　奈央子　秋山　裕子
　阿部　薫　天野　加代子　荒川　智絵
　飯山　恵　石井　奈保子　石井　真里恵
　石井　真理子　石飛　真琴　磯　幸絵
　市岡　恵美　井出　茉里　伊東　明子
　猪股　希　岩渕　寿子　植草　麻衣子
　宇佐見由佳　卯之原　愛　梅原　典子
　卜部　志津香　悦永　裕子　大畠　三保子
　岡部　沙織　岡宮　知恵　沖田　寿恵
　小幡　二三枝　片山　直子　加藤　允恵
　金丸　佳　上尾　麻里子　上村　友茂恵
　神吉　海　川尻　綾子　川畑　啓子
　菊地　絢　北林　愛子　日馬　めぐみ
　桐山　文　久保田聡子　光銭　道子
　河野　詠子　小谷　早智子　小田部真弓
　小山　菊　小山　美那子　近藤　麻衣子
　齊藤　亜由美　佐伯　郁枝　嵯峨　圭子
　酒井　麻紀　坂田　亜矢子　佐々木より子
　佐藤　芳　鮫島　久美子　島影　あゆみ
　菅原　あゆみ　菅原　恵　杉沢　亜紀子
　鈴木　沙織　鈴木　旬子　鈴木　直子
　相馬　佳奈子　曽根　江利子　高垣　昌代
　高梨　奈々　高橋　香織　高橋　幸子
　滝澤　美祐紀　竹之下知子　田嶋　直子
　田辺　和香子　谷口　瞳　玉井　佑季
　千々谷眞理子　塚田　希実子　蔦谷　愛実
　鶴岡　資恵　出町　祥子　寺尾　麻希
　寺田　愛子　戸井田朋子　飛田　綾
　飛田　麻紀子　中西　絵美　中西　真弓
　中村　美樹　名執　有紀　西尾　佳奈美
　丹羽　一絵　根岸　紀子　根本　奈津子
　野崎　歩　濵畑　千絵　檜垣　朱美
　日向　里香　蛭田　久美　藤井　智子
　藤澤　雅美　藤田　栄香　藤野　麻奈
　藤巻　亜希子　古薗　智美　古田　麗
　細井　涼子　本多　奈美　眞下　江利子
　増子　裕子　増田　奈津子　松尾　衣里子
　松岡　康子　松鳴　理絵　馬原　依理
　丸山　晴美　美澤　さやか　宮間　美咲
　村上　夏子　村松　香織　目黒　睦
　文字山知子　八木　明日香　八木　麻理絵
　八谷　祥子　柳　綾子　柳澤　美保
　柳田　輝世　矢野　奈保　山崎　みはる
　山田　麻衣子　山田　祐子　山西　裕子
　山本　香織　山本　知加　山本　真由美
　横井　亜希　吉川　裕子　吉田　絢子
　吉田　幸代　吉田　美紀　米山　麻里
　若田　知子　和田　恵　渡邉　千絵
　渡邉　奈穂　渡辺　絵美　渡邊　香子

研究補助員・眼科学
　横嶋　愛美

視能訓練士・眼科
　並木　祐子　益子　初美　宮崎　かづき

事務員・医事課
　大澤　千恵子　大谷　千尋　岡田　有矢
　熱田　毅　笠原　渉　佐藤　静恵
　鈴木　宏治　髙瀬　なつみ　髙瀬　里帆
　玉垣　直子　寺島　理恵　中川　明子
　野澤　香枝　前田　紗弥子　山地　佐和子
　横岡　瞳

事務員・医療連携室
　関口　葉子

事務員・看護部
　岩崎　麻衣子　矢嶋　佐紀子　山井　ゆき

事務員・健康医学センター
　関口　明乃

診療放射線技師・放射線部
　鈴木　宏明

保育士・看護部
　鈴木　里紗

薬剤師・薬剤部
　伊東　育己　佐藤　恵　堀内　珠代
　増田　奈央子　松本　真寿美　山本　靖子

理学療法士・リハビリテーション科
　木下　一雄

臨床検査技師・中央検査部
　中田　瞳美　森沢　まり子　若林　真理子

臨床工学技士・臨床工学部
　柴崎　多恵子　渡邊　拓也

15.8.1　診療技術員・産婦人科
　村尾　明美

15.10.1　診療技術員・内視鏡部
　真田　涼子

青戸病院

15.4.1　看護師・看護部
　相磯　美弥子　有馬　明子　有本　利恵
　飯島　美里　石川　由貴子　伊藤　麻貴
　猪野　絹江　井上　瞳　上井　美菜子
　及川　千鶴　大塚　優美　奥山　紀子
　小澤　晴美　小野寺こずえ　笠松　紫乃
　狩野　裕美　鎌田　知美　川田　晶
　川畑　佳子　河村　芙美　久保　貴子
　小池　理恵　小嶋　章子　坂上　しのぶ
　鈴木　智絵　髙橋　麻美　谷口　知嘉子
　田村　友佳　中村　美樹　中山　尚美
　南波　一美　西川　望　萩原　理恵
　長谷川敦子　畑　紘子　林　早苗
　春木　智子　東　明子　平栗　沙織
　藤野　裕子　古園　瑞穂　堀野　博子
　増山　悠子　松尾　圭依子　三浦　瞳
　茂岱　愛子　桃原　綾子　山内　真梨子
　山崎　純子　横手　由里香　吉田　郁
　米倉　裕美

(無)＝無給、(派)＝派遣中、(外)＝定員外、(非)＝非常勤、院単取得＝大学院単位取得者

青戸病院

15.4.1　事務員・医事課
　鈴木　恵理　登藤　聡子　野村　知加

事務員・看護部
　三角　綾子

保育士・看護部
　土橋　真美

薬剤師・薬剤部
　白石　育美

第三病院

15.4.1　栄養士・栄養部
　糸田　涼

看護師・看護部
　青山　郁子　秋山　聡美　浅野　由佳
　芦澤　裕子　伊井　まどか　五十嵐　泉
　井川　京子　池田　ひとみ　石川　裕美
　石山　裕子　伊藤　千晃　伊藤　弥子
　猪野尾雅之　今井　直美　入澤　千春
　海野　亜由美　浦野　亮　大石　真由美
　大川　喜世　大木　加奈子　青木　里衣
　大社　理奈　大坂　桂子　大寺　加奈子
　大野　有美　小椋　明子　長田　有沙
　金子　経　亀山　華代　河合　絢子
　川内　優美　川上　久絵　川口　千恵
　川田　佳奈子　川名　亜希子　喜名　寛子
　小島　由佳　小沼　恵　小林　絵梨
　小林　宏美　佐藤　美和　佐藤　由美子
　残間　佳奈子　塩澤　卓巳　庄司　千幸
　菅原　芳　杉浦　良重　鈴木　佳林
　鈴木　千恵　砂川　みのり　堰免　真由美
　髙島　麻有　髙橋　真理　高間　寿恭
　田村　愛子　田村　朋子　登嶋　美鈴
　土岐　瑞貴　富田　妙子　中ノ森裕子
　西澤　瑞恵　長谷川裕子　原田　千恵
　光林　雅美　日高　絵美　藤　順子
　降旗　真美　古川　洋子　古野　栗子
　本坂　美代里　真柄　夕子　松井　美佳
　松丸　由香里　御手洗陽子　三村　葵
　宮水　優実　森本　あずさ　守谷　有子
　屋舗　舞　山川　美砂　山岸　愛美
　山口　早苗　山口　久実　吉本　大樹
　六本木晶子　涌井　良枝　渡辺　真弓
　渡邉　彩子

研究補助員・リハビリテーション医学
　谷合　恵

作業療法士・リハビリテーション科
　横井　安芸

事務員・医事課
　稲葉　美重子　小池　美幸　菅沼　瑞穂
　並木　麻衣子

事務員・看護部
　熊川　美寿紀　高橋　佳子　竹澤　多恵子
　服部　久美子

診療放射線技師・放射線部
　稲川　天志

保育士・看護部
　髙橋　梨紗

薬剤師・薬剤部
安藤　千恵　片本　吉美　鈴木　強志　田村　麻衣
　中山　明子　武藤　明子　山下　菜穂子
　山本　絵理

理学療法士・リハビリテーション科
　木山　厚

臨床検査技師・中央検査部
　松永　貫子

臨床工学技士・臨床工学部
　佐々木　雄一

15.7.1　診療放射線技師・放射線部
　木澤　史江

柏病院

15.4.1　看護師・看護部
　安宅　亜衣　石井　由香　板倉　可奈
　猪俣　絵美　今泉　友恵　岩井　夕希
　岩本　琴子　遠藤　則子　大井　智子
　大鳴　かおり　大高　めぐみ　岡本　瑠美
　小川　敦子　奥本　めぐみ　小倉　裕子
　小田切久美　小野　聡子　小野　雅子
　笠間　三和　方喰　真理　金井　理美
　金子　美穂　川合　里実　木戸　友美
　木村　早織　木村　友紀　楠見　紗織
　久米　由美子　倉持　祐子　後藤　ひとみ
　後藤　祐三子　齋藤　歩美　佐川　裕子
　佐々木宮子　佐藤　郁恵　重田　奈緒美
　志田　美由紀　下之薗　恵　新江　優子
　田井　美樹子　高野　裕美　髙橋　晶子
　立久井美智代　種谷　美和　徳毛　佳子
　永井　理枝　中川　まなみ　中島　浩美
　長瀬　京子　根葉　友佳　野口　育恵
　野口　孝子　野崎　由美　野田　早苗
　林　愛　速水　育子　東　久乃
　引地　朝子　藤野　明子　保坂　亜由美
　松田　佳織　松山　涼子　三平　佳那衣
　宮崎　鮎美　森山　優子　山尾　佳子
　山田　亜依　山田　真理子　有里　明日香
　和氣　由枝　脇田　広美　渡邊　美穂

事務員・医事課
小野　郁子　鈴木　恵美子　代田　典子　村上　智恵

事務員・看護部
　遊馬　千春　酒井　茉梨子　鈴木　綾
　福田　香　水谷　晃子

事務員・総務課
　三上　麻衣

診療放射線技師・放射線部
　藤林　紀子

薬剤師・薬剤部
　加藤　啓子　楠木　幸子　佐藤　やす江
　水野　亜希子　谷地舘真紀　簗瀬　雅代
　山崎　貫子

理学療法士・整形外科
　安部　知佳

臨床検査技師・中央検査部
　菱木　光太郎　三浦　あゆみ

昇格・降格・役職任免

柏病院

15.10.1　4等級（副主務）
　主任　栄養士　栄養部　高橋　徳伴

転入

法人事務局

15.10.1　山内　恵子　事務員　人事課　附属病院
　松山　トシエ　4等級(副主務)　含監補佐　人事課　第三病院

本院

15.10.1　伴　美智子　4等級(副主務)　看護教員　看護部　法人事務局
　長谷川英雄　7等級(主務)　薬剤師　薬剤部　青戸病院
　山崎　昌宏　5等級(副主務)　診療放射線技師　放射線部　青戸病院
　長谷川美奈子　臨床検査技師　中央検査部　青戸病院
　加藤　潤一郎　5等級(副主務)　薬剤師　薬剤部　第三病院
　小林　誠　7等級(主務)　栄養士　栄養部　柏病院

	橋本 廣信	6等級(主務)	診療放射線技師	放射線部	柏病院
	岩谷 理恵子	4等級(副主務)	臨床工学技士	臨床工学部	柏病院
青戸病院					
15.10.1	滝本 千恵子	5等級(副主務)	臨床検査技師	中央検査部	附属病院
	成沢 亮祐	4等級(副主務)	診療放射線技師	放射線部	附属病院
	金子 昌弘	6等級(主務)	薬剤師	薬剤部	第三病院
	村田 英子	4等級(副主務)	調理師	栄養部	柏病院
第三病院					
15.10.1	島崎 博士	5等級(副主務)	薬剤師	薬剤部	附属病院
	福島 崇弘		事務員	医事課	附属病院
	杉江 里美		調理師	栄養部	青戸病院
	五十嵐千絵		事務員(ソーシャルワーカー)	事務部	青戸病院出向
	大塚 賢治	4等級(副主務)	診療放射線技師	放射線部	柏病院
柏病院					
15.10.1	白井 修平	6等級(主務)	診療放射線技師	放射線部	附属病院
	鈴木 孔一郎	5等級(副主務)	事務員	医事課	附属病院
	勝田 岳彦	5等級(副主務)	臨床工学技士	臨床工学部	附属病院
	若月 和子		事務員	医事課	附属病院
	市原 仁美		栄養士	栄養部	附属病院
	山本 直彦	4等級(副主務)	栄養士	栄養部	第三病院
	長野 伸也		診療放射線技師	放射線部	第三病院

部内異動

大学					
15.10.1	東端 典子	5等級(副主務)	研究補助員	薬理学講座第1	
	伊藤 敬夫	7等級(主務)係長	事務員	晴海トリトンクリニック	
	松田 直子	4等級(副主務)	診療放射線技師	晴海トリトンクリニック	
	石野 舞		診療放射線技師	放射線部	
	島田 季世子		事務員	病院管理課	
第三病院					
15.10.1	石田 厚	6等級(主務)	事務員	総務課	

復職

本院				
15.6.1	大久保絵理		看護師	看護部
15.9.1	佐久間寿美代		歯科衛生士	歯科
15.9.6	白旗 麻衣子		看護師	看護部
15.9.11	渡邉 ゆう子		看護師	看護部
15.11.27	渡邉 律	5等級(副主務)	看護師	治験管理室
青戸病院				
15.8.27	吉益 有紀		事務員	医事課(看護部出向)
15.9.14	野澤 沙由里		看護師	看護部
15.9.20	河本 佐知子	4等級(副主務)	看護師	看護部
15.11.1	鈴木 恵津子		事務員	医事課(看護部出向)
15.11.15	大石 めぐみ		看護師	看護部
第三病院				
15.6.1	若林 実砂	4等級(副主務)	看護師	看護部
15.9.1	溝江 美代子	4等級(副主務)	栄養士	栄養部
15.9.16	齋藤 由美子		看護師	看護部
柏病院				
15.6.22	髙木 知恵	4等級(副主務)	看護師	看護部
15.6.27	丹野 千恵美	4等級(副主務)	看護師	看護部
15.7.1	飯田 恭子		看護師	看護部
	宇佐美直美		看護師	看護部
	高橋 愛理		看護師	看護部
15.7.26	松本 綾子		看護師	看護部
15.9.1	髙岡 美也子		事務員	医事課(看護部出向)
15.9.16	日比野幸子	5等級(副主務)	看護師	看護部
15.11.29	挾間 しのぶ	5等級(副主務)	看護師	看護部
15.11.30	荒井 實枝	4等級(副主務)	看護師	看護部

休職

本院					
15.6.2	大塚 美紀		看護師	看護部	
15.6.23	久保 博美		看護師	看護部	
15.6.25	黒川 香奈子		栄養士	栄養部	
15.7.1	神 由美子		看護師	看護部	
15.8.5	田尻 記子		看護師	看護部	
15.9.1	河野 詠子		看護師	看護部	
15.10.10	関口 恭子	5等級(副主務)	看護師	看護部	
15.10.30	鶴川 治美		臨床検査技師	中央検査部	
15.11.1	本間 千温		看護師	看護部	
15.11.15	柴田 聡子		栄養士	栄養部	
15.11.17	仙浪 理英	5等級(副主務)	看護師	看護部	
15.11.28	稲葉 涼子		看護師	看護部	
青戸					
15.7.10	大石 めぐみ		看護師	看護部	
15.9.1	野澤 沙由里		看護師	看護部	
15.9.12	岩崎 あづさ		看護師	看護部	
15.10.1	石野 智子		看護師	看護部	
15.10.10	山田 あおい	5等級(副主務)	看護師	看護部	
15.10.27	高山 英子	4等級(副主務)	栄養士	栄養部	
第三					
15.6.3	西村 淳子	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.6.16	諏訪 由美子		看護師	看護部	
15.7.1	中川 綾		看護師	看護部	
15.7.9	上原 由美子		看護師	看護部	
15.8.8	伊藤 有紀		看護師	看護部	
15.9.7	松本 光子	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.10.5	中里 恵子		看護師	看護部	
15.10.19	椎名 まき	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.11.1	古川 洋子		看護師	看護部	
15.11.5	峯元 千清	5等級(副主務)	看護師	治験管理室	
柏					
15.6.2	挾間 しのぶ	5等級(副主務)	看護師	看護部	
15.6.7	村上 康子	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.6.9	川緑 乃栄		看護師	看護部	
15.6.14	伊藤 奈津子		看護師	看護部	
15.6.15	佐々木郁子	5等級(副主務)	看護教員	柏看護専門学校	
15.7.19	横山 靖子	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.8.19	成瀬 かおり		看護師	看護部	
15.9.1	伊藤 千恵子		看護師	看護部	
15.9.6	雨宮 美恵	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.9.28	植竹 美紀		看護師	看護部	
15.10.3	佐々木瑠美		看護師	看護部	
15.10.24	関根 智美		看護師	看護部	
15.11.21	林 由美	5等級(副主務)	看護師	看護部	
15.11.23	北森 由美子	4等級(副主務)	看護師	看護部	

職種変更

青戸				
15.9.1	小林 温子	事務員	医事課(看護部出向)	
柏				
15.9.1	小檜山美代子	事務員	医事課	

依願退職

法人事務局					
15.9.30	小田 美香		事務員	人事課	
	長津 八重子		舎監補佐	人事課	
大学					
15.6.30	佐藤 隆子	4等級(副主務)	研究補助員	薬理学第1	
本院					
15.6.14	竹内 里絵子		看護師	看護部	
15.6.30	杉山 緑	4等級(副主務)	診療技術員	耳鼻咽喉科	
	中川 理恵	4等級(副主務)	看護師	看護部	
	大野 直子		事務員	医事課	
	田中 正美		薬剤師	薬剤部	
	海野 タカ子		調理師	栄養部	
	城戸 彰市		栄養士	栄養部	
15.7.10	川嶋 美香		看護師	看護部	
15.8.31	齊藤 純子	4等級(副主務)	看護師	看護部	
	木山 千里		診療技術員	耳鼻咽喉科	
	田中 涼子		診療技術員	産婦人科	
15.9.1	森 恵		看護師	看護部	
15.9.5	樋山 舞		看護師	看護部	
15.9.30	石塚 裕美子		看護師	看護部	
	田島 忍		看護師	看護部	
	田村 涼子		事務員(ソーシャルワーカー)	事務部(第三病院出向)	
	関 瑠理		診療技術員	内視鏡部	
15.10.4	乙坂 香	4等級(副主務)	看護師	看護部	
15.10.31	小林 誠	7等級(主務)	栄養士	栄養部	
	河野 詠子		看護師	看護部	
15.11.4	宮本 美由紀	5等級(副主務)	看護師	看護部	
15.11.12	田中 鳴		看護師	看護部	
15.11.29	樋口 ちぐさ		看護師	看護部	
青戸病院					
15.7.31	桃原 綾子		看護師	看護部	
15.8.31	北原 久美子	5等級(副主務)	薬剤師	薬剤部	
15.9.30	清水 真紀子	4等級(副主務)	薬剤師	薬剤部	
	小林 淳子		看護師	看護部	
15.10.31	岩本 奈緒	4等級(副主務)	看護師	看護部	
	佐々木珠緒		看護師	看護部	
第三病院					
15.6.30	小山 真理子		看護師	看護部	
	杉浦 マリ		診療放射線技師	放射線部	
15.7.31	森本 あずさ		看護師	看護部	
15.9.30	仲田 綾乃		調理師	栄養部	
	小林 宏美		看護師	看護部	
	松本 裕美子		看護師	看護部	
	三谷 麻美		看護師	看護部	
15.10.31	髙橋 奈緒美		事務員	医事課	
柏病院					
15.6.30	岩崎 智子	4等級(副主務)	薬剤師	薬剤部	
	木戸 奈津子		看護師	看護部	
15.7.20	渡邊 美穂		看護師	看護部	
15.7.31	安藤 京子		看護師	看護部	
15.8.31	宮脇 英理沙		看護師	看護部	
15.9.30	小林 有紀		看護師	看護部	
15.11.12	野崎 由美		看護師	看護部	

死亡退職

法人事務局					
15.9.5	栗原 正江		寄宿舎管理員	人事課	
本院					
15.11.5	下平 昭治	7等級(主務)	診療放射線技師	放射線部	

その他

本院					
15.6.1	加藤 蘭子		診療技術員	内視鏡部	
	林 明子		診療技術員	内視鏡部	

■訂正■

2003Vol.4 人事(職員)

昇格・降格・役職任免

本院

15.4.1 7等級(主務)(誤)→8等級(副参事)(正)

看護師	看護部	吉本	久美子
看護師	看護部	玉上	淳子
事務員	施設用度課	今関	美津男
事務員	施設用度課	髙田	弘之
診療放射線技師	放射線部	瀧澤	代輔

青戸病院

15.4.1 7等級(主務)(誤)→8等級(副参事)(正)

看護師	看護部	原	桂
診療放射線技師	放射線部	岩田	真

柏病院

15.4.1 7等級(主務)(誤)→8等級(副参事)(正)

看護師	看護部	菅原	直子

部内異動

本院

15.4.1 8等級(副参事)(誤)→6等級(主務)(正)

時田 聡	事務員	医療安全管理課

附属病院医師人事委員会報告
BULLETIN BOARD

■診療部長
本院

15.9.1	村山　雄一	脳血管内治療センター	脳神経外科診療医長から
15.10.1	矢永　勝彦	肝胆膵外科	
	小林　進	手術部	本院手術部診療部長（兼任）から

青戸

15.9.1	小山　照幸	リハビリテーション科	診療医員から
15.12.1	和田　鉄郎		診療部長代行から

柏

15.4.1	太田　有史	皮膚科	診療医員から

■診療部長（兼任）
柏

15.7.1	小林　正之	中央検査部	血液・腫瘍内科診療部長

■診療部長代行
青戸

15.7.1	和田　鉄郎	泌尿器科	第三病院診療医長から

柏

15.9.1	和田　靖之	小児科	診療医長から

■診療副部長（兼任）
本院

15.10.1	小林　進	肝胆膵外科	本院手術部診療部長

■診療医長
本院

15.7.1	鈴木　正彦	神経内科	診療医員から
	小曽根基裕	精神神経科	診療医員から
	石田　祐一	肝胆膵外科	青戸病院外科診療医長から
	村山　雄一	脳神経外科	診療医員から
	髙橋　現一郎	眼科	米国留学から帰国
15.9.1	長谷川　節	神経内科	診療医員から
15.10.1	蔵田　英明	晴海トリトンクリニック	糖尿病・代謝・内分泌内科診療医長から
15.11.1	仲泊　聡	眼科	診療医員から
	関谷　透	晴海トリトンクリニック	放射線診療医員から

青戸

15.10.1	津田　隆	小児科	診療医員から
	西井　寛	産婦人科	診療医員から
15.11.1	松尾　光馬	皮膚科	診療医員から

第三

15.7.1	古田　希	泌尿器科	柏病院から
15.11.1	染谷　泰寿	糖尿病・代謝・内分泌内科	診療医員から

柏

15.7.1	鈴木　康之	泌尿器科	本院から
15.11.1	澤内　聡	脳神経外科	診療医員から

■非常勤診療医長
本院

15.5.1	神谷　直樹	産婦人科（兼任）	柏病院診療副部長
15.10.1	野崎　秀次	小児科	
	浜田　秀雄	総合母子健康医療センター小児脳神経外科部門	

青戸

15.6.1	谷口　正幸	循環器内科（兼任）	第三病院診療部長

第三

15.6.1	谷口　郁夫	循環器内科（兼任）	本院診療副部長

柏

15.8.1	益田　律子	麻酔部	

■非常勤診療医長（兼任）
本院

15.7.1	河合　一重	眼科	柏病院診療部長
15.9.1	角谷　宏	内視鏡部	第三病院診療部長

柏

15.10.1	野崎　秀次	小児科	
	田尻　久雄	内視鏡部	本院診療部長

■診療医員
本院

15.4.1	望月　英明	呼吸器内科	レジデント修了
15.6.1	望月　太一	呼吸器内科	青戸病院診療医員から
15.7.1	長田　正久	救急部	消化器・肝臓内科診療医員から
	矢野　健太郎	救急部	外科診療医員から
	水野　泰孝	感染制御部	横浜総合病院から復帰
	武田　邦彦	消化器・肝臓内科	柏病院診療医員から
	原　志野	腎臓・高血圧内科	柏病院診療医員から
	笠井　督雄	循環器内科	留学から帰国
	大久保辰雄	外科	国立西埼玉中央病院から復帰
	佐野　芳史	外科	春日部中央総合病院から復帰
	髙橋　直人	外科	町田市民病院から復帰
	辻　美智子	整形外科	都職青山病院から復帰
	茶薗　昌明	整形外科	柏病院診療医員から
	岩木　久満子	精神神経科	第三病院から
	北島　具秀	脳神経外科	東大宮病院から復帰
	浅川　晋宏	眼科	学会認定医資格取得
15.8.1	安澤　龍宏	救急部	仏国留学から帰国
15.9.1	伊達　太郎	循環器内科	米国留学から帰国
	西川　勝則	外科	米国留学から帰国
	衛藤　謙	外科	米国留学から帰国
	根岸　由香	外科	復職
	小松崎　眞	皮膚科	感染制御部診療医員から
	茂木　真	産婦人科	准診療医員（無給）から
	松脇　由典	耳鼻咽喉科	国内留学から帰校
	関谷　透	放射線部	社会保険大宮総合病院から復帰
15.10.1	斎藤　桂介	呼吸器内科	富士市立中央病院から復帰
	山路　朋久	呼吸器内科	第三病院准診療医員から
	齋藤　勝也	消化器・肝臓内科	救急部診療医員から
	吉村　和修	腎臓・高血圧内科	国立佐倉病院から復帰
	原　洋一郎	腎臓・高血圧内科	川口市立医療センターから復帰
	井坂　剛	糖尿病・代謝・内分泌内科	准診療医員（無給）から
	原　章彦	外科	米国留学から帰国
	仲泊　聡	眼科	神奈川リハビリテーション病院から復帰
	三角　茂樹	放射線部	准診療医員（無給）から
	幸田　公人	皮膚科	准診療医員から
	延山　嘉眞	皮膚科	准診療医員から
15.11.1	大原　こずえ	眼科	青戸病院診療医員から
	塩谷　尚志	健康医学センター	乳腺・内分泌外科准診療医員から

青戸

15.6.1	望月　英明	呼吸器・感染症内科	本院診療医員から
	古田　昭	泌尿器科	本院診療医員から
15.7.1	内田　亮	耳鼻咽喉科	社会保険大宮総合病院から復帰
	小山　照幸	リハビリテーション科	第三病院診療医員から
15.8.1	馬場　仁	消化器・肝臓内科	学会認定医資格取得
	久能　守	循環器内科	関病院から復帰
	武田　聡	循環器内科	救急部診療医員から
15.9.1	石野　裕理	精神神経科	精保指定医取得
	柴田　淳	小児科	国立成育医療センターから復帰
15.10.1	泉福　恭敬	血液・腫瘍内科	准診療医員から
	松尾　光馬	皮膚科	准診療医員から
	萩原　正則	皮膚科	准診療医員から

第三

15.7.1	小野田　泰	消化器・肝臓内科	厚木市立病院から復帰
	福田　実	消化器・肝臓内科	准診療医員から
	森　力	循環器内科	本院准診療医員（無給）から
	矢野　勝治	精神神経科	湘南病院から復帰
	諏訪　勝仁	外科	富士市立中央病院から復帰
	川野　勧	外科	厚木市立病院から復帰
	中野　信宏	整形外科	川西病院から復帰
	鶴岡　三知男	産婦人科	社会保険大宮総合病院から復帰
	上久保　毅	リハビリテーション科	神奈川リハビリテーション病院から復帰
	高田　耕太郎	リハビリテーション科	東京都リハビリテーション病院から復帰
15.9.1	笠間　絹代	血液・腫瘍内科	復職
15.10.1	白川　崇子	放射線部	本院診療医員から
	五十嵐努	皮膚科	准診療医員から

柏

15.7.1	齋藤　敦	消化器・肝臓内科	准診療医員から
	池田　雅人	腎臓・高血圧内科	本院診療医員から
	濱口　明彦	腎臓・高血圧内科	本院診療医員から
	二村　浩史	外科	本院診療医員から
	石井　文久	整形外科	本院診療医員から
	田中　俊英	脳神経外科	厚木市立病院から復帰
15.10.1	横山　正人	外科	独国留学から帰国
15.11.1	池田　真仁	呼吸器・感染症内科	救急部診療医員から
	植村　信之	救急部	復職
	横山　正人	皮膚科	外科診療医員から

■准診療医員
本院

15.4.1	赤松　久子	形成外科	レジデント修了
15.7.1	藤田　明彦	救急部	本院病院病理部准診療医員から
	小田　彩	消化器・肝臓内科	東急病院から復帰
	相良　憲彦	消化器・肝臓内科	本院救急部准診療医員から
	佐藤　幹	精神神経科	河津浜病院から復帰
	黒坂　大三郎	整形外科	社会保険桜ヶ丘総合病院から復帰
	長井　泰樹	皮膚科	町田市民病院から復帰
	延山　嘉眞	皮膚科	東川口病院から復帰
	瀬田　拓	リハビリテーション科	東京逓信病院から復帰
	吉田　奈穂子	歯科	国内留学から帰校
15.11.1	石井　卓也	脳神経外科	富士市立中央病院から復帰
	田母神　令	脳神経外科	大森赤十字病院から復帰
	山路　朋久	呼吸器内科	診療医員から
15.12.1	齋藤　隆和	産婦人科	

青戸

15.4.1	黒川　直清	小児科	レジデント修了
	丹羽　洋二	耳鼻咽喉科	レジデント修了
15.7.1	馬場　仁	消化器・肝臓内科	厚木市立病院から復帰
	丹　愛子	小児科	柏病院から
	萩原　正則	皮膚科	本院から
	福田　佳三	耳鼻咽喉科	同愛記念病院から復帰

第三

15.7.1	福田　実	消化器・肝臓内科	町田市民病院から復帰
	山形　哲也	外科	本院救急部准診療医員から
15.9.1	平川　吾郎	総合診療部	准診療医員（無給）から

柏

15.7.1	齋藤　晃	救急部	国立西埼玉中央病院から復帰
	野崎　和之	小児科	本院准診療医員（無給）から
	鳥海　久乃	外科	救急部准診療医員から
	平出　周	整形外科	柏病院救急部准診療医員から

■准診療医員（無給）
本院

15.6.1	児玉　純子	歯科	准診療医員から
15.7.1	小林　英之	腎臓・高血圧内科	本院診療医員から
	田中　康之	循環器内科	診療医員から
	宮村　香代子	循環器内科	柏病院から
	布山　裕一	小児科	診療医員から
	冨井　雅人	脳神経外科	診療医員から
	岡本　太一	歯科	第三病院麻酔部から
	中井　太一	歯科	柏病院麻酔部から
15.8.1	伊達　太郎	循環器内科	米国留学から帰国
	茂木　真	産婦人科	国内留学から帰校
15.9.1	三角　茂樹	放射線部	都立荏原病院から復帰
15.10.1	小澤　真帆	産婦人科	診療医員から
	我那覇文清	放射線部	診療医員から

青戸

15.7.1	林　美紀	皮膚科	

第三

15.7.1	田中　知行	外科	留学から帰国

■非常勤診療医員
本院

15.7.1	石川　悦久	腎臓・高血圧内科	
	秋山　芳見	産婦人科	
	三宅　彰	眼科	
	小池　健	眼科	
	長井　泰樹	晴海トリトンクリニック（兼任）	本院准診療医員
	加藤　章嘉	晴海トリトンクリニック（兼任）	本院診療医員
15.10.1	小森　成	形成外科	

青戸

15.6.1	阿部　邦彦	循環器内科	

柏

15.7.1	日野　昌力	内視鏡部（兼任）	本院診療医員

■非常勤診療医員（兼任）
本院

15.7.1	太田　史一	晴海トリトンクリニック	本院耳鼻咽喉科診療医員
15.9.1	三谷　幸恵	耳鼻咽喉科	第三病院非常勤診療医員
15.11.1	石橋　由朗	臨床腫瘍部	本院外科診療医員
	佐野　芳史	臨床腫瘍部	本院外科診療医員
	髙橋　直人	臨床腫瘍部	本院外科診療医員

青戸

15.10.1	松田　浩二	内視鏡部	本院診療医員

柏

15.10.1	日野　昌力	内視鏡部	本院診療医員
	内山　勇二郎	内視鏡部	本院准診療医員

■附属病院医療安全管理室室長
15.4.1	安田　信彦	参事

■診療部長解除
本院

15.9.30	小林　進	肝胆膵外科	
15.11.30	大石　幸彦	泌尿器科	

青戸

15.11.30	大西　哲郎	泌尿器科	

柏

15.6.30	立石　修	中央検査部	辞職
15.8.31	久保　政勝	小児科	

■診療部長（兼任）解除
青戸

15.8.31	宮野　佐年	リハビリテーション科	
15.11.15	落合　和彦	外科	

■診療副部長解除
青戸

15.6.30	星野　寛倫	リハビリテーション科	東京都リハビリテーション病院派遣
15.11.30	尾崎　雅美	麻酔部	

本院

15.9.30	青木　和博	耳鼻咽喉科	辞職

■診療医長解除
本院

15.6.30	古田島　大	呼吸器内科	英国留学
	小谷野康彦	整形外科	東急病院派遣

第三

15.8.31	中田　哲也	総合診療部	辞職

■診療医員解除
本院

15.5.31	根岸　由香	外科	一般休職
	木村　高弘	泌尿器科	米国留学
15.6.30	坂本　和彦	消化器・肝臓内科	東急病院派遣
	大渕　敬太	精神神経科	松下電器東京健康管理センター派遣
	湯坐　有希	小児科	米国留学

	向井　英晴	外科	辞職
	佐藤　慶一	外科	辞職
	井上　聡	外科	米国留学
	池尻　真康	外科	賛育会病院派遣
	田中　眞希	整形外科	辞職
	鈴木　秀彦	整形外科	米国留学
	高橋　寧子	眼科	東急病院派遣
	濱田　幸雄	耳鼻咽喉科	辞職
	殷　祥洙	リハビリテーション科	韓国留学
15.7.31	角　徳文	精神神経科	仏国留学
15.8.31	柏木　秀彦	循環器内科	辞職
	北島　具秀	脳神経外科	
15.9.30	石川　威夫	呼吸器内科	富士市立中央病院派遣
	杉本　伸子	精神神経科	辞職
	黒部　仁	外科	米国留学
	根岸　由香	外科	金町中央病院派遣
	浅川　晋宏	眼科	神奈川リハビリテーション病院派遣
15.10.31	茶薗　昌明	整形外科	米国留学
15.12.31	宇野　真二	臨床腫瘍部	辞職
青戸			
15.6.30	伊藤　周二	消化器・肝臓内科	厚木市立病院派遣
	吉田　成美	小児科	辞職
	千葉　康之	小児科	都立大塚病院派遣
	浦島　容子	眼科	一般休職
15.7.31	伊藤　高史	循環器内科	関病院派遣
	長　剛正	外科	辞職
15.10.31	斑目　旬	泌尿器科	一般休職
	長谷川太郎	泌尿器科	一般休職
	前田　重孝	泌尿器科	一般休職
第三			
15.5.31	笠間　絹代	血液・腫瘍内科	一般休職
15.6.30	浜田　宏子	消化器・肝臓内科	辞職
	三好　勲	外科	東急病院派遣
	矢島　浩	外科	富士市立中央病院派遣
	二川　康郎	外科	米国留学
	菅谷　真吾	泌尿器科	厚木市立病院派遣
	谷野　千鶴子	皮膚科	東川口病院派遣
	古賀　良一	産婦人科	社会保険大宮総合病院派遣
	植松　海雲	リハビリテーション科	東京都リハビリテーション病院派遣
15.8.31	青木　薫	呼吸器・感染症内科	富士市立中央病院派遣
15.9.30	笠間　絹代	血液・腫瘍内科	辞職
	成尾　孝一郎	放射線部	富士市立中央病院派遣
15.10.31	深田　雅之	消化器・肝臓内科	米国留学
柏			
15.6.30	阿部　文	腎臓・高血圧内科	辞職
	西村　浩	精神神経科	厚木市立病院派遣
	金田　利明	外科	辞職
	石坂　淳	整形外科	富士市立中央病院派遣
	寺尾　亨	脳神経外科	東大宮病院派遣

■准診療医員解除

本院

15.6.30	大平　寛典	救急部	町田市民病院派遣
	二上　敏樹	消化器・肝臓内科	国立西埼玉中央病院派遣中
	鳥巣　勇一	消化器・肝臓内科	国内留学
	石川　悦久	腎臓・高血圧内科	辞職
	赤松　久子	形成外科	富士市立中央病院派遣
	山崎　典子	皮膚科	辞職
15.7.31	堀　香織	皮膚科	一般休職
15.9.30	間森　聡	消化器・肝臓内科	厚木市立病院派遣
	近藤　誠	腎臓・高血圧内科	川口市立医療センター派遣
青戸			
15.6.30	松平　秀樹	外科	町田市民病院派遣
	丹羽　洋二	耳鼻咽喉科	同愛記念病院派遣
15.8.31	丹　愛子	小児科	神奈川県衛生看護専門学校附属病院派遣
第三			
15.6.30	伏谷　直	消化器・肝臓内科	町田市民病院派遣
	桑田　雅雄	循環器内科	国立西埼玉中央病院派遣
	石橋　嘉津雄	整形外科	東急病院派遣

■准診療医員（無給）解除

本院

15.7.31	児玉　純子	歯科	辞職
15.8.31	野中　雄一郎	総合内科(腫瘍センター小腫瘍外科部門)	独国留学
15.10.31	岡本　太一	歯科	辞職
第三			
15.5.31	佳久　真之	歯科	辞職
15.7.31	田中　知行	外科	厚木市立病院派遣

■非常勤診療医長解除

本院

15.9.30	矢部　武	耳鼻咽喉科	

■非常勤診療医員解除

本院

15.5.31	山崎　辰男	晴海トリトンクリニック	
15.6.30	山本　純子	糖尿病・代謝・内分泌内科	辞職
	初海　宏	整形外科	辞職
	鈴木　秀彦	晴海トリトンクリニック	米国留学
	濱田　幸雄	晴海トリトンクリニック	辞職
15.8.31	小田原　靖	産婦人科	
	北原　慶幸	産婦人科	
	中野　真	産婦人科	
	後藤　誠	産婦人科	
15.9.30	熊谷　吉夫	整形外科	国立療養所東宇都宮病院派遣中
15.12.31	鷹橋　伸子	晴海トリトンクリニック	産休
第三			
15.8.31	厚川　裕志	産婦人科	

■非常勤診療医員（兼任）解除

青戸

15.10.31	松田　浩二	内視鏡部	

柏

15.7.31	伊藤　高史	循環器内科	関病院派遣

東京慈恵会公報
BULLETIN BOARD

人事

平成15年4月1日（火）	**新採用**	前田　聡子	看護教員	（慈恵看護専門学校）
平成15年10月1日（水）	**転出**	4等級（副主務）	看護教員	伴　美智子　（附属病院　看護師）

行事

平成15年6月17日（火）　1．東京慈恵会理事会・評議会・通常総会が開催された。

平成15年11月18日（火）　1．東京慈恵会理事会が開催された。

ご寄付のお礼

BULLETIN BOARD

ご寄付のお礼と今後のご協力のお願い

東京慈恵会医科大学は創立以来、人類の最大の願望である健康を追求し、教育機関・医療機関としてその使命を果たしてまいりました。最高・最善の医療を提供していくために不断の努力を傾注しておりますが、そのためには大学・病院の基盤整備が不可欠でございます。

創立百二十周年記念事業として、教育・研究の中心となる大学1号館が平成14年3月末に竣工し、今後も本院外来棟の建築、青戸病院の新築、第三病院や柏病院の整備などを進めてまいります。これらの基盤整備には莫大な資金が必要となり、大学も自助努力を重ねておりますが、自ずからの資金調達には限界があります。

平成12年10月より、創立百二十周年記念募金を目標額50億円として申込受付を開始いたしております。皆々様のご支援をいただき、平成15年11月末までに下記の寄付金の申込がございましたので、ご報告申し上げます。

本学の将来計画と学祖の精神にご賛同賜り、関係各方面から心温まるご支援をいただき、ご芳志に厚くお礼申し上げます。はなはだ厳しい経済状況のもと、ご協力をお願いいたしまして誠に恐縮ではございますが、そのご支援が必ずや社会に還元されていくこととご理解賜りますよう、さらにより一層の努力をしていく所存です。今後とも関係各位の全面的なご協力・ご支援を、よろしくお願い申し上げます。

創立百二十周年記念事業委員会委員長
学校法人 慈恵大学 理事長 **栗原　敏**

寄付金申込者区分別累計
（平成15年11月30日現在）

総申込者数	3,505件	
総申込金額	3,017,751,595円	
区分別申込状況		
・卒業生 OB	956件	750,647,020円
・父兄会関係	291件	612,394,000円
・教職員	1,868件	296,535,565円
・賛同企業	346件	1,298,700,000円
・一般団体&個人	44件	59,475,010円

寄付者名簿

BULLETIN BOARD

同窓生

相澤　純雄
安澤　龍徳
伊藤　喜哉
大曽根　了
風野　國昭
川口　陽太郎
小林　弘雄
斉藤　和夫
渋谷　幸友
髙橋　義人
中林　豊
那須　元信
西田　伸
林　　徳佐
本郷　不可思
舛田　忠巳
松平　敬充
水上　四郎
水庭　弘進
三宅川　登
宮本　繁方
矢野　精太郎

同窓会支部・クラス会

慈恵医大　三八会
昭和48年卒業生一同
同窓会新潟県支部

父兄

郡司　弘文
永吉　学
新見　孝
松本　健児
大和　滋

教職員

鈴木　正章

一般個人

菅原　勝教
立石　紀美子
内藤　英子
廣田　榮二郎

企業・一般団体

医療法人　青葉通クリニック
東芝メディカル（株）
バクスター（株）

●平成15年6月1日から平成15年11月30日までにご寄付くださった方々の内容に基づき作成しました。

●教職員で給与、賞与から天引きされている方々ならびに分割振込みされている方々のご芳名は省略しています。（初回掲載済）

●ご芳名は敬称を省略し、五十音順に掲載しました。

●尚、この名簿には匿名希望の方の分は掲載しておりません。

The JIKEI 2004 Winter Vol.5

発　行　学校法人　慈恵大学
発行人　理事長　栗原　敏
連絡先　〒105-8461　東京都港区西新橋3-25-8
　　慈恵大学　広報課
電　話　03-3433-1111
ＦＡＸ　03-5472-4796
e-mail　koho@jikei.ac.jp
号　数　第5号
発行日　2004年1月1日
http://www.jikei.ac.jp/

編集後記

今号より表紙のモチーフとして、学祖・高木兼寛の名前を冠した南極の高木岬を採用しました。高木岬は、ビタミン研究の世界的な貢献を認められて命名されたもので、この表紙のデザインには、医療の進歩に心血を注いだ創立者の精神を引き継いでいこうという想いが込められています。今回の特集では、先進的なコンセプトで開設された「脳血管内治療センター」にスポットを当てて、積極的に先端医療に取り組む姿勢をお伝えしました。本誌では、今後もこのような新しい取り組みをお伝えするなど、本学の現状についてより解りやすくお伝えしていきたいと考えております。よりお役に立つ法人誌にするためにも、是非、本誌をご覧いただき、ご意見やご感想をお寄せくださいますよう、お願い申し上げます。

大学広報委員会委員長　阿部　俊昭